

海外留学記

青年英語教師のアメリカ留学記

——1969年夏——Ⅲ

辻井 榮 滋

Ⅲ. 中西部から——イリノイの夏

●夜を越えて

ワシントンを出たグレイハウンド・バスは、前方の国道以外は何も見えない闇一色の夜の中をひたすらに突っ走る。初めのうちは、まだワシントンの市街、あるいは郊外の街灯や家々の灯、あるいは色取り取りのネオンの輝きが、私たちの目を楽しませてくれた。が、やがてそれもまばらになり、そしてほとんど見えなくなってしまうと、窮屈なバスのシートに座る乗客としてはこの上ない退屈を覚え始める。前部の運転手のすぐ後ろに席を占め、前方を見つめていたが、それにも飽き、しかも時計が零時近くを指すと、退屈と疲労からまぶたがようやくお互いに恋人関係にあるかのように近づき始める。内心、やはり眠っておかねばと思うが、また反面、明日の家族との対面のことを思うと、胸がいっぱいになる。そうすると、近づき愛をささやき始めていた両まぶたが離れてぱっちり開く。そしてしばらくは、明日の午後のシカゴでの対面のことばかりに気を取られて時が経って行く。他の乗客の中にも眠れずに目をしょぼしょぼさせている者が、ふり向いてみるとまだかなりいる。車内のライトが消してあるのでよくは見えないが、口を開けてすでに夢の世界へ行ってしまっている者もある。たった一人、目をパチッと開け、神経を一点に集中させ、眠気を防止するためにガムを噛み、ときどき小窓からベッと唾を吐く者があった。他ならぬ私の前の運転手である。

午前1時、道路わきに見えるサインによってペンシルヴァニア州に入ったことを知る。そして、月も変わって8月1日である。7月が何かもう遠い昔日のことのように感じられる。

午前4時、バスは静かにピッツバーグに滑り込み、20分間停車する。大製鉄都市の雰囲気は、夜で市街が眠っていてもはっきり感じ取れる。その数多の煙突群、あるいは工場への鉄道の引き込み線が、夏の夜明け前の薄明かりから目に入って来るからだ。

ピッツバーグを出てからも、なかなか眠れなかった。目は痛いほど開けるのが辛いのだが、心中はいつまでも大人気なくそわそわしているのだ。こうした経験はよくあるのだが、ましてや異国の地、しかも顔も知らない家族にきょうの午後長いバスの旅のあとに会うのだとなると、ひとしおその興奮も増すのである。しかし、夜行バスの疲れはかなり激しく、いつしか浅いものでは

あるが、しばしとうとうとしたようだった。

やがてオハイオ州に入り、エリー湖岸の一大工業都市クリーヴランドに到着、朝食のためしばらくバス停の食堂で一息入れた。ほとんど眠っていないので、少々吐き気を催すほどであった。それで、朝食としては別に取らずに、よく冷えた西瓜で喉を潤した程度であった（この西瓜の冷たさといい甘さといい、今でも忘れないでいる）。とにかく目が痛い。もう overnight a bus などこりこりである。私を含めて乗客のほとんどを不快にしたもう1つの原因は、バスの快適な諸設備にもかかわらず、運転手の拙い運転技術にもあったことを指摘しておかねばならない。前述したが、それだけでもアメリカ人の手先の不器用さがよくわかる。中にはまずまずの者もいるが、大ていは拙い。特にギア・チェンジの操作法など、見ていると腹が立つほどである。うまくギアが入らずにガーガーと音を立てる。そのうち速度が落ちて、やっとギアが入ると、もうすでもとのギアに入れ換えねばならないくらい、しゃくり出す。それでも、しゃくったまま走っているのである。……こういう運転手が、グレイハウンドにさえかなりいるようである。しかし、乗客にすればたまったものではない。昼間ならいざ知らず、夜間の際など「ガーガー」とか「ガタガタガタ」と何度かやられると、とても眠れるどころか、その度にイライラしてしまうのだ。

10時40分にエリー湖の最西端の沿岸に位置するトレド (Toledo) に止まる。しかし、客の乗降だけですぐに出る。シカゴまであと500キロほどだ。ほとんど真っすぐな道が何マイルも続き、その左右にはトウモロコシがもうかなりの大きさに生長しているのが見られ、ミッド・ウェスト (中西部) に来た感を強くするのだった。

1時40分、シカゴまでに停車する最後のバス・ディーポウ、サウス・ベンド (South Bend) に到着。インディアナ州の最北端にあって、ミシガン州に接する美しい町だ。インディアナの最北端に位置するにもかかわらず、サウス・ベンドとはこれいかに？ ここで25分休憩して、さああと200キロばかり、もうシカゴまでノン・ストップである。

このグレイハウンド・バスの収容人員は、43名である。運転手にこの大バス会社の従業員数を尋ねてみたが、多すぎてわからないという。シカゴ区とかニューヨーク区とかワシントン区というように、ちょうど日本の国鉄の〇〇機関区のように配置されているので、全体の数となるとどうもお手上げらしい。それに運転手だけでなく、クラーク、荷物係等々種々雑多な分野があり、なるほど運転手に聞いてみることの方が少々酷なのかも知れない。全米では何万人となくいるのだろう。また、バスの台数については、これも首をかしげて「2万台以上はあるでしょう」という彼の返答であった。とにかく巨大なアメリカ資本の力を予測するまた別の材料である。日本の面積の20数倍、モンタナ州1個と日本とがほぼ同面積なのだから、全く大きさという点でも比較にならない。その巨大な大陸を縦横にこのグレイハウンドは日夜走り続けているわけだ。

予定より1時間ほど遅れて4時過ぎに、ついにアメリカ第3位（ついこの間まで第2位だったが、わずかの差で現在ロスアンゼルスが第2位）の人口を誇る大都市シカゴへとバスは滑り込んだ。ハイウェイが片側3車線、4車線となり、聳え立つ摩天楼が目につき始める。

私の胸は高鳴っていた。ジョンストン夫妻やその子供たちが間違いなく迎えに来てくれるだろうかという不安と、初対面に対する期待とが大きく交錯して、じっとしていられないほどであった。それはシカゴに着く1時間ばかり前からしだいに大きくなって行き、バスがハイウェイをそれてシカゴのダウンタウンに入り、街路をいくつか曲がり、バス・ターミナルのゲイトへと

通じる地下道トンネルに入った時、クライマックスに達したのであった。それとともに17時間に及ぶワシントンからの旅が、やっと終わりを告げた。

●感激の対面

大きなスーツケースとポストンバッグはかさ張り、バスの腹底部の荷物入れに入っているの、WAW からもらった真っ赤なショルダーバッグだけ肩に掛けてバスを降りた。ここでもやはり黒人の係がバスの腹底部を開けて、透き間のないくらいぎっしりと詰まっている乗客の荷物を、そのチェック・カードの符号をいちいち確認しながら、乗客に渡してくれる。その順番を待つ間にも、私はゲイトの内側の多くの出迎えの人々に目をやっていた。ジョンストン夫妻……まだ写真も見ていないし、ともかく話にならない。まもなく自分の荷物を手にするや、1人のまだ若い婦人が近づいて来た。

「あなたはジョンストン夫人ですか？」と私は切り出した。

「ええ、そうです。エイジ？」

「そうです！」

感激の一瞬に私の声も上ずった。見ると、私が日本から送っておいたカラー写真——私を写した——が、夫人の胸にピンで留めてあった。（直接送ったのではなく、EILの方に送り、EILがパークリッジをメンバーのホーム・ステイの地とし、その中で、このジョンストン一家が私を選んでくれたのである。）まさしくジョンストン夫人なのであった。その後ろには2人の子供がいて、恥ずかしそうに微笑んだ。妻の手紙によれば、男の子は11歳、女の子は9歳のはずであった。ジョンストン氏はまだ会社で、いつもの帰宅時間にはもどるだろうとのことで、この3人が私を迎えてくれたのである。そしてこの時同時に、他のメンバーも各々の家族の一員となって散って行った。

シカゴだと聞いていたのですぐかと思ったら、夫人の運転する車は時速60から70マイル（96から112キロ）のスピードでハイウェイを突っ走る。よく聞くと、シカゴ市内ではなく、シカゴの北西10マイルばかりに位置するパークリッジ（Park Ridge）市というまた別の市（人口4万程度）なのであった。オープンにしたフォードの白いコンヴァーティブル（たたみ込み式ほろ付き自動車）は、陽光に一段とまぶしく光りながらパークリッジへと足を速めた。初めて外車に（ヴァーモントでジョンのフォルクスワーゲンに一度乗っているが、いわゆる小型車ではなく）、しかも美人の夫人の運転で、私はその傍らのゆったりした助手席に席を占め、子供たちは後部の席ではしゃいでいる。……といった絵はまるで夢のようで、ことに17時間も夜行バスの旅の直後であってみれば、ほとんど信じ難いほどの充足感を覚えざるを得なかった。この車中であって、私はこれから始まるジョンストン一家との20日間の生活を疲れた頭でぼんやりと想像してみるのだった。

フリーウェイを15分か20分突っ走り、やがてあるレーンへと入った。そこがパークリッジに至る、いわゆる入り口である。そして街に一足入ると、一目で高級住宅街であると感知できる。碁盤の目のように綺麗に区画され、各道路は真っすぐに延びている。そしてエルムの木が高く大きく伸びていて、道の両側からアーチを描き、ちょうどトンネルを形作るように育っている。したがってこの下を通る時、どんなに日差しが強くても涼しさが肌に伝わって来る。道の両側のこれらのオークの並木の後ろはすぐ家並みではなく、前庭になっており、そのさらに奥に家があるのだ。だから、道路自体が幅広く感じられる。各前庭の数ヶ所からは、回転式の散水器が水を飛ば

している。そのしぶきと濡れた芝生の緑とがひととき美しい。

そんなのんびりとした快適な住宅地を縫って区画をいくつか曲がると、やがて「北エルモア通り（North Elmore Street）」とサインの見える道路の交差した角を折れたところに車は止まった。そこがジョンストン一家の住居であった。このあたりも同じように大きなエルムの木がアーチを描いていて涼しい。通りは車もめったに通らないので、この涼しさが気分を爽快にしてくれる。そう大きくはないが、2階建ての小じんまりとした感じのいい家である。ここも芝生がやはり美しい。

車を家の前に止めて、早速家の中に入った。2人の子供は母親に促され、喜んで私の荷物を家の中に運んでくれた。玄関を入るとすぐ居間になっており、その左手の部屋が食卓を置いたダイニング・ルームで、この2つの部屋の間にはドアも仕切りもない。床はすべて草色の絨毯が敷き詰められている。夫人はこのダイニング・ルームを通り、さらに奥の台所を通って階段を降り、「地下室」へと私を案内した。そしてこの部屋が、20日間私の部屋となった。最初、ここが私の部屋だと言われた時、少々意外な気がした。客を地下室で寝かせるなんて……と。だがよく考えてみると、それはごく当たり前のことで、また仕方のないことでもあった。（日本で地下室と言えば、何か暗くて冷たい陰気なものを想像するが、アメリカの場合はそうではない。各部屋は家族自身のためにあって、他人のためにあるのではない。とにかく自分たちの部屋さえあればそれでいいのだ。日本の家屋のように客本位の間取りはしていない。最低必要数の部屋だけあって余分なものはない。客が他人の家に泊めてもらうということはめったにないからである。）それから2階は、夫婦と子供2人の部屋が計3室、あとはバス・ルーム、それだけである。とすると、珍客というか、家族が1人増えれば、ベイスメントしかないのである。普段は子供の遊び場になっているが、ソファを操作するとセミ・ダブルベッドになり、すぐ寝室に早変わりする。それに机もカラーテレビも揃っている。階段も絨毯敷きである。ともかく日本流の「地下室」のイメージをそのまま「ベイスメント」に置き換えると大変な誤解を生じよう。後述する夫人の両親がここを訪ねて泊まる場合にも、やはりこの部屋——ベイスメントで眠るのである。

17時間もバスの中に籠り詰めにされて来たので、さすがに疲労は大きく、普段着に着替えてベッドに仰むけになると、全くホッとするばかりだった。妻が送り返したというジョンストン一家からの手紙（夫人による）が妻の手紙に同封されて届いていたが、それをこの家で読もうとは何とも変な感じであった。それによると、彼らはずいぶんと私の到着を待ち兼ねてくれているようで、かなり長い手紙である。家族は既述通り4人で、フレッド・ジョンストン氏（37歳）はある製薬会社の弁護士、夫人（38歳）はマリリンといって元精薄児施設の教師で今は主婦、子供はフレデリックという11歳になる男の子とクレアという9歳の女の子である。彼ら自身の言葉を借りれば「We are a very typical US, Midwest, suburban family ……」ということである。

そうこうしているうちに、フレデリックが相手になってほしいらしく声をかけるので、上に上がって行った。一息ついて、クレアと3人でキャッチボールをやった。フレデリックが投げた球を少し強く打つと、彼は驚いたように「エイジは強打者だ！」と言ってはしゃぐのだった。やがて近所の子供たちが、そして夫婦連中が珍しそうにやって来て、次々に握手を求めた。いよいよ待望のホーム・ステイが始まったのである。私を彼ら隣人に紹介する夫人の声は力強く誇らし気であった。

私が着いて1時間ばかりして、ジョンストン氏が帰って来た。先ほどの手紙の、“my husband is a very nice looking, tall, slim, gray haired man.”とある、まさにその人であった。口数が少なく物静かな人なので、最初は取っつきにくく感じたが、それはまもなく解消した。次の彼との会話は、何よりも私を彼らの一員にしてくれた。

「エイジ、私の妻のことをジョンストン夫人などと呼ばないで、マリリンと呼んで下さい。」

「でも、私の国ではそういう習慣がないので、なかなか……」

「あなたは今アメリカにいるんですよ。」

「『郷においては郷に従え』ですか？」

「その通りです」

こうして私は、完全に彼らの身内となった。（「マリリン」と呼ぶのは気恥ずかしくてならなかったが、日が経つに連れて、それも解消して行った。）

●クインシーへの誘い

まもなく夕食が始まった。マリリンが腕に縋りをかけて作ってくれたロースト・チキンであった。私は鶏肉が嫌いで、それまでめったに口にすることがなかったので、丸焼きを前に置かれて少し気持ちが悪くなるほどであったが、しかし彼女の好意を初めから拒むこともできず、思い切ってナイフを入れるのだった。

彼らは私の到着の日を今か今かと待ち兼ねていたということを何度も口に表わした。マリリンは、特にバスの着く前などは興奮気味だったという。その彼らの期待を物語るものの1つを私はテーブルのそばの戸棚の上の銀食器の間に見つけた。それは私がニューヨークから（ニューヨークで初めて彼らの住所が知らされたので）出しておいた絵はがきで、銀食器の間にきちんと立てかけてあったのである。

ついでに彼ら4人のほかにもう2人、いやもう2匹の家族がいることも付加しておこう。デイルというビーグル犬とゲイルというシャム猫である。一般に犬猫と言えば、仲の悪い代名詞のようになっているが、この2匹は例外で、実に大人しく仲もすこぶる良い。

夕食のあと、私たちはヴェランダに出て椅子に腰を下ろしながら夕べの一時を過ごした。私はみやげに持参した風鈴をこの風の渡って来るヴェランダの一角に吊るしてみた。チリンチリンと東洋の風が感じられて、日本が懐かしかった。ワシントンからの疲れもどこかに消えたかのように、興奮も手伝って、私はすでに打ち解けて夫妻と談笑を心行くまで楽しんだ。私はこの夫妻からできる限り多くを学びたかったし、夫妻もまた私から東洋を学びたいのであった。話題は「流動するアメリカ人」と、最初からずいぶん堅苦しい内容に入って行った。この談笑については、のちに次のような一文を綴ってみた。

「アメリカ人に故郷はないのだろうか。彼らは常に動いているからだ。プラトルボーロのボブにしてもドンにしても、またこのジョンストン一家にしても、その他いろんなアメリカ人が絶えず流動している。ボブは来年スペインへ、またドンもトルコへ行くと言っていた。ドンの場合、家庭を持っているから一家で動くのである。ジョンストン一家も、いつかカリフォルニアに住んでみたいという。なぜそのようにしばしば移り住むのかと問うと、答は「そこが気に入ったか

ら」というのである。フレッドはこうも言った。「前に住んでいた家には暖炉がなかった。冬はこのあたりではとても寒いので、暖炉のある家が欲しかった」と。若い人たちについても同じことが言える。高校を卒業して大学に進学する際にも、大体自分の住んでいる街の近辺の大学には行かないようだ。この間も2、3の女子学生（この9月から大学に行く）と話していたら、彼女らはアリゾナ州立大やウィスコンシン州立大に入るのだという。独立自尊の道を教えられている彼らなのだから理解できないこともないが、まだまだ日本人の考え方と違う点の1つであろうか。もっとも日本でも近頃の若者は、そういう点でかなりアメリカ的になって来ているとも言えるが、ともかく、アメリカ人はよく移住する。これは、やはり祖先の名残りなのであろうか。西進運動でパイオニアたちが常に動き続けた。あの逞^{たくま}しい血が今も彼らに脈々と受け継がれているのであろうか。」

まだパークリッジに着いて間もないのに、しかも相当疲れていたにもかかわらず、夕食後ヴェランダでこれだけのことを語ったり聞いたりしたのも、私の異常なまでの好奇心からにはほかならない。

最後にマリリンが、「もう休んだら？」と前置きして、私にさらに大きな喜びを与えてくれた。「ねえ、エイジ、私たち明日クインシーって私の郷里に行こうと思ってるんだけど、行かない？ もちろん疲れているでしょうから無理には言わないけど、よかったらどう？ あなたの勉強にプラスになることがあると思うわ。」

Quincy など私には初めての固有名詞だった。地図を見ると、ミシシッピ川の河岸にある小さな町で、イリノイ州の西の果てになる。ミシシッピ川を渡ればもうミズリー州だ。疲労した体に少し自信が持てなかったが、私にとってはまたとないチャンスであった。2度とないかも知れぬ機会であった。おまけに、リンカンで有名な州部スプリングフィールド、さらにはマーク・トウェインの故郷の町ハニバル・タウンへも行こうとなると、もう興奮してしまって、その爆弾的歓待に小踊りして喜ぶ私であった。実を言うと、マリリンの高校時代の同窓会（彼女によれば reunion）がクインシーで開かれるので、ウィークエンドでもあり、それでは一家総出で行こうということになったのである。（無論、もし明日その同窓会がなかったとしても、20日間のうちに1度はクインシーへ私を連れて行くつもりだった、とマリリンは言った。）

“flat, dull area”とフレッドが呼んだ、丘さえもなく、ただ平坦な土地が無限に続く、いわゆる典型的なアメリカの顔の1つが、夢路に着こうとする私をいつまでも引き留めていた。

●マクアインタイア一家とフェア

翌朝7時半にマリリンに起こされ、まだ少し寝足りないままに朝食を取って、8時半には例の白いフォードに私を含めて一家5人が乗り込み、一路クインシー目指して約300マイル（東京-京都間に匹敵）の旅に出発した。ウィークエンドの朝に見るパークリッジの家並みや木々の緑は、到着した昨夕よりはるかに新鮮で空気も爽やかである。空も、長い車の旅にふさわしく雲のほとんどない真っ青な中西部の空である。

4車線、5車線のフリーウェイをしばらく走ると、やがて都心部を離れ、昨夜夫妻が話してく

れた“flat, dull area”へと入り、道も2車線となって果てしなく続く。両側にはトウモロコシ畑が延々と続く。山など全く見当たらない。大豆の広大な畑も見える。両側をこの緑のフィールドに挟まれて、フリーウェイは退屈なまでに続く。これが“typical American district”の1つなのである。

「“The corn field is the horizon.”（トウモロコシ畑が地平線ですね。）」

と言うと、夫妻は「そうだ。」と言って笑った。

ブルーミントン、そして州部スプリングフィールドの街外れを走り、ジャクソンヴィルに至り、この頃から少し土地の起伏が生じ、坂を下っては登り、登っては下ることをかなり数えた。

ところで、イリノイ州では、やはりリンカン＝ダグラス論争（Lincoln-Douglas Debate）が人々の心に焼きついているようである。

「クインシーには Lincoln-Douglas Hotel というのがあるし、また Lincoln-Douglas Savings（銀行）というのものもあるのよ。」と、マリリンは説明してくれた。ともかくイリノイ州はリンカンの土地だ。車のナンバー・プレートにも共通して“LAND OF LINCOLN”とシンボル・マークが入っているように。（リンカン＝ダグラス論争については後述する。）

起伏の多い土地をかなり走ると、やがて美しい静かな町並みへと入る。クインシーであった。1時40分にマリリンの実家に到着、5時間余りの車の旅であった。パークリッジよりもっと閑静でだだっ広い、いわゆる「中西部の片田舎町」という表記が当てはまるだろう。この家は、クインシーの繁華街というか、メイン・ストリートから少し外れた住宅区域である。家そのものや前庭などはパークリッジのそれらと大同小異だが、全体的には何かもっと広々としており、澄明な大気を感じる。平屋建ての小じんまりとした気持ちのよい家、それがマリリンの両親の住む家なのであった。

「ここで生まれて育ったの？」と、私が聞くと、

「いいえ、父母がやっていた農場だよ。今は弟夫婦がそこをやっていて、父母はここで暮らしているの。」と、マリリンが説明してくれた。

連絡はしてあったらしく、彼らマクアインタイア夫妻は大喜びで私を迎えてくれた。ニューヨークやワシントンで見かけたみすばらしい「寂しい老人たち」と違って、彼らの容姿や言葉の受け応えには、今は息子夫婦に仕事を譲って引退し、自分たちだけの新しい家を建て、悠々自適の生活を送っている者の余裕と明るさが常に漂っているのが私にも直感できた。そして、親子というのは洋の東西を問わず同じものであることも、目前で微笑ましく受け取った。嫁いだ娘が久しぶりにその夫と子供たちとともに自分たちのもとにもどって来る、それは親の持てる掛け替えのない大きな喜びの1つであろう。

「エイジ、今晚私たちは、昨日も言っていたように同窓会に行きます。ところで、この近くで昨日から5日間フェアが開かれてるそうだから、一度子供たちと行って来たら？」

遅い昼食のあと、マリリンがそう言った。フェア……、願ってもないことであった。彼らは退屈^{しの}げにと私に気を遣ってくれたのだろうが、私にはそれがまた大きな喜びであった。

4時頃だったろうか、私たち——グランドマー（マクアインタイア夫人）、フレデリック、クレアと私——は、グランドマーの運転する車でフェアへと向かった。フレッドとマリリンは、私たちがフェアに出かけている間に同窓会に行くはずであった。

家から2、3分も走ると、もう民家など見られないあたり一面緑の野原が広がっている。トウモロコシ畑、豆畑、牧場……などがずっと延びていて、単調なほどである。道も珍しく舗装されていない。畑と畑の間を縫ってやっと車が行き交えるほどの田舎道で、私はむしろこんな道の方が懐しく、温かみを感じるのだった。

途中、一家の農場に立ち寄って案内された。すでに紹介したように、彼らの息子でマリリンより7つ年下の弟夫婦が親のあとを継いで、この広大な200エーカーの農場をやっているのである。その彼口バートが出て来た。赤ら顔で頑丈そうな、いかにもファーマーという感じだ。その娘で10歳になるメラニー（Melanie）という女の子が興味深そうに、しかし恥ずかしそうに東洋人の私を見つめていた。彼ら一家も、あとでフェアに行く予定だと言った。時間がなかったので詳しくは見られなかったが、馬や牛、トラックやコンバイン等々、さまざまな機械や家禽類が見えた。

そのあと、もう1つ途中にあるムア・マンズ（Moor Man's）という大牧場にも立ち寄った。何でもかなり名の知れた大農場らしく、牛乳は無論のこと、医薬品まで造っているという。私たちは、自動的に搾乳しているところを見学した。1頭の搾乳が終わると、また別の乳牛が搾乳器の前に現われ、次々と搾乳され、容器には真っ白い原乳が見る見る溜まって行く。見ていてなかなか楽しいものだ。おまけにこの農場の宣伝用のみやげ品（薬の試供品など）までもらった。そしていよいよフェアへと向かった。

それまではこの広大な緑野にあって、ほとんど車など見かけもしなかったのに、やがてそれが急に目について来た。しかも、町の気配など一向にない。いつまで経っても、道の両側はトウモロコシ畑や緑の草地なのである。

広々とした緑の原に人々の姿が見えた。ちょうどゲイトらしきものが入り口のところに作られている。車を仮設の駐車場に置いて、私たち4人はグランドマーを先頭にフェアの方へと近づいた。賑やかな歓声やら話し声やら呼び声が耳に近くなった。

私たちがまず見物したのは、いわゆる各種品評会のテントであった。兎や鶏、野菜類など、すべて農家が丹精籠めて育てたものばかりである。出品物1つ1つの名前は覚えていないが、各々優秀な作品には金紙や銀紙が貼付されているところなどは、日本の品評会風景とほとんど変わらないようである。テントに日が強く当たって、中は非常に暑苦しかった。

フレッドとクレアが空腹を訴えたので、グランドマーは仕方がないというような顔で、しかしかわいい孫のために喜んで食べ物の特設テントへと進んだ。このテントの中も大変なごった返しようであった。4人ともハンバーガーとコークを注文して一息入れた。フレッドとクレアはよほど空腹だったらしく、大きな口を開けてハンバーガーをかじるのだった。私はアメリカの食べ物にあまり好物を見いだせなかったが、このハンバーガーとコークの取り合わせは妙に気に入る、その後も何度この取り合わせを味わう機会を持ったことだろう。熱々のハンバーガーに辛子をつけて、冷たいコークを合わせ飲みながらかじる……これこそ最もアメリカ的な食事の1つではないだろうか。

さて腹ごしらえができると、フレッドとクレアは乗り物の方に興味を持ちだし、そちらの方へとグランドマーと私を引っぱって行った。メリーゴーランドやロケットコースター、観覧車などが草原の上に特設され、子供たちの人気を集めて賑やかである。フレッドとクレアも、これらのいくつかに乗り込んで大喜びするのだった。またこのほかにも、幾人かの個人的な商人が子供

相手の商売に忙しかった。特にゲーム的要素の強いいくつかの遊びには、どこの子供たちでも一度はやってみたいという気持ちを多かれ少なかれ持つもので、結果は常に行商人の方が一枚上、気がつくと子供たちは何百円も（いや、何十セントも）損をしていることになる。見ていると、このクインシーの子供たちもやはり同じようであった。

それからまた別のテントでは、いろんな方面から展示即売にやって来た業者がずらりと店を並べている。「草原デパート」とでも呼ぼうか。食料品、衣料品、家具類、鉢植えらしきもの、台所用品、化粧品等々、かなり豊富な種類である。私はこのうちの化粧品、特に香水に目を奪われて、かなりの思案をしたものであった。帰りを待ち侘びている妻にまだみやげらしきものを何も買っていなかったのである。何でも、ワトキンズというミネソタの会社で、この中西部ではかなり名前も知られているとのグランドマーのことは信用して、いくつかあったうちから1つを選んだ。小さな瓶にもかかわらず、7ドル50セント（約2,700円）であった。

また別の広場では、小型自動車の競走会やポニーのレースなども盛大に行なわれていた。仮設の観覧席は、熱狂的な老若男女でいきれ立っていた。それにしてもアメリカ人というのは、実に熱狂的な国民である。

日が傾いて夕空を染め始めたので、そろそろ帰路に着こうと足を駐車場の方に向けるや、オープンカーがその上に美女を乗せて、この広場に入りかけるところであった。1台だけでなく、10台近くも同じような車の行列である。観覧席の人たちが帰路に着かないはずである。クインシーのクイーンを選ぶのだ。先頭のオープンカーには昨年度のクイーンが美しく着飾って、人々に手を振る。続いてこの地方より抜き（？）の娘さんたちが同じように広場を一周する。観覧席からは拍手と若者の口笛が絶えない。中にはこれでもクイーン選抜の参加者かと思われるような女の子もいたが、日本人とアメリカ人の女の見方の相違であろうか。私にはどうしても納得の行かぬ女の子が2、3人いたのである。美人なんて誰の目にも同じものだと思うのだが……。それに比べて昨年度のクイーンはさすがに（？）まずまずの美人だった。目の大きなハイスクールのお嬢さんで、少し冷たい感じの美しさだが、審査員の目にはそこが良かったのかも知れない。

かなり強い午後の日差しを受けて、楽しいフェアを過ごした私たちは帰路に着いた。駐車場には、来た時よりはるかに多くの車が並んでいた。道路に出ても、所狭しと数珠つなぎに増加する車の列があった。フェアへの参加者は減るところか、増える一方なのであった。

日本では一昔前まで、いや今でも地方に行くと、年1回か2回のお祭りや縁日や夜店などに根強い人気がある。それはそこに住む人々の生活の一部であり、唯一の楽しみであり、話の種であった。今もそれらを懐古する人々が多い。アメリカでも、フェアは日本のそれとは同一でないにせよ、やはり地方の人々の心に生きている。彼らは年1回、わずか数日のこの催し物には大きな期待と愛着を抱いているようである。特に子供たちは、毎年このフェアを楽しみに待ち焦がれているのである。

帰途、トウモロコシ畑に止まって、大きく育っているトウモロコシを撮ってみたい、とグランドマーに話したら、「じゃ、うちの農場のトウモロコシを撮ったら？」と、私の申し出を気軽に聞いてくれ、夕焼け空の美しく見える彼らの農場の道路わきに車を止めてくれた。

アメリカの中西部の代表的穀物の1つトウモロコシは大きく生長していた。私の背丈よりずっと高く、もう実も収穫できるほどに大きくなっている。その毎日の生長が著しいので、夜など大

きく育って行く音が聞こえて来るのだそうだ。もう夕闇が降りて来ていたので、私のカラー・スライド・フィルムでうまく写るだろうかと少々心配しながらシャッターを押したのだった。（結果は上出来だった。）

●ハニバル・タウン

翌3日、10時前、グランドパーとグランドマーに見送られ、私たち5人はフレッドの運転で、すがすがしい夏の朝風を切って一路マーク・トウェインの故郷ハニバル・タウンへと飛ばした。クインシーからミシシッピ川沿いにずっと南下する。世界に知れ渡るその大河にはまだお目にかからないが、フレッドやマリリンに「あれがミシシッピの岸よ。」と説明してもらいながら1人心踊らせる。マリリンは、いろいろと事細かくこのあたりのことについて説明を加えてくれる。何でもこのあたり一帯は、昔白人とインディアンとの戦いがよくあったそうだ。あのリンカン・ダグラス論争とともに、このクインシー一帯はインディアンとの戦いでも有名なのである（クインシーの町にはインディアン・ミュージアムがある。）。

さて、クインシーから20マイルほど南下すると、やがて右手にかなり長い鉄橋が見えて来る。マーク・トウェイン記念橋（Mark Twain Memorial Bridge）だ。そしてこの橋の下を流れるのが、偉大なる大河ミシシッピであった。私はこの時初めてミシシッピに接したのである。そのまま橋を渡らずに、私たちはこの橋の^{たもと}袂に車を止めて、しばし川辺に遊んだ。もうこのあたりはずいぶん上流なので、川幅は思っていたほど広くはなかったが、それでも数百マイル下流の広大な川幅を想像するには十分の広さである。川岸で貝の化石をいくつか拾った。フレデリックも化石に興味があるらしく、熱心に探していた。

銀色に輝くマーク・トウェイン記念橋を渡り切った対岸が、ハニバル・タウンである。その橋の先に見られる小高い丘が、あのカーディフの丘（Cardiff Hill）だ。木々の緑に包み込まれるように、くっきりと白い灯台が立っている。ハックルベリイ・フィンを引き取った、あのダグラス未亡人（Widow Douglas）の家が立っていた丘だ。そんなことを考えながら、私たちのフォードはこの橋をハニバル・タウンへと一気に走り越えた。

ハニバルが現実離れた夢のように美しい町に映ったのは、私がいかに興奮していたためか、それとも雲1つない快晴で、しかも湿気の少ない快適な日に訪ねたためであったろうか。多分そのどちらも当たっているのだろうけれど、それらを抜きにしても、この町は実際美しい小さな田舎町であった。

マーク・トウェイン記念橋を渡り終えると、カーディフの丘がすぐ目の前にあった。ハニバルの町はこの丘の南側、ミシシッピ川に沿って小じんまりとある。橋を渡って左に折れ、2ブロック行くと、マーク・トウェイン・ヒル通りという短い通りがある。この通りに面して南向きに、白いペンキ塗りのトウェインの家と、彼の遺品を集めた美術館（Mark Twain Home-Museum）とが質素に並んで立っている。ようやく私は、アメリカ近代文学の父マーク・トウェインの少年時代の町（いわゆるホームタウン）に来ているのだと自覚し、大きな感動を受けた。胸の内には熱いものが湧き上がって来るのだった。

彼の家横には、あの『トム・ソーヤの冒険』の「光栄のペンキ塗り」の章に出て来るペンキ塗りで、トムが他の友だちにいっぱい食わせたあのヘイが、やはり白く塗られて立っていた。無

論当時のものではないが、当時ここに立っていたのだという。ジムやベン・ロジャース、ピリーやシッドなどの仕事を思い起こすには十分であった。「人生はやっぱり生きるだけの値打ちがある。」と悟ったトムの誇り高い顔が浮かぶようであった。

ついでにこのヘイの前のサインボードの文も紹介しておこう。

TOM SAWYER'S FENCE
 HERE STOOD THE BOARD
 FENCE WHICH TOM SAWYER PERSUADED HIS GANG
 TO PAY HIM FOR THE PRIVILEGE OF WHITEWASHING.
 TOM SAT BY AND SAW THAT IT WAS WELL DONE.

トウエインの家はごく質素な2階建てで、その白い周囲といくつかの窓の日除けと装飾の緑の調和が鮮やかだ。快晴なので、ことに白はまぶしく目に飛び込んで来る。

隣りのミュージアムにも入ってみたが、原稿や手紙、写真、衣類、家具、胸像……等々の遺品が集められて興味をそそった。大勢の見学者で狭い室内はいっぱい、マーク・トウエインの人気の高さを裏づけしているようであった。彼の家のもぶしい白さに比して、このミュージアムは一面蔦が絡んで青々としているのが印象的で、彼の遺品や多くの貴重な品々を是非もう1度見たいと願うのだが……。

このトウエインの家とミュージアムの、通りを隔てた真向かいに、トムのガール・フレンドだったベッキー・サッチャー (Becky Thatcher) の家、それにジョン・クレメンズ法律事務所、ピラスター・ハウスが並んで立っている。ベッキー・サッチャーは言うまでもなく、『トム・ソーヤの冒険』で、トムがエミイ・ローレンスの次に好きになった。物語ではもちろん最初のガール・フレンドだ。あの物語の中で、少年と少女が淡い恋心を抱いて行く過程が思い出され、この小さな町であんな美しい、好感の持てるロマンス(?)が育っていたのだと思うと、何となくすがすがしい思いがした。

法律事務所やピラスター・ハウスもかなり重要だが、ここではベッキーの家の説明文を引用するに留める。

BECKY THATCHER'S HOME

This was the home of Becky Thatcher, Tom Sawyer's first sweetheart in Mark Twain's book "Tom Sawyer". Tom thought Becky to be the essence of all that is charming in womanhood.

さらに家の板壁にもこんな説明文があった。

This is the Becky Thatcher House. Part of it is furnished just as it might have been in those long-ago days when a girl with yellow braids peered shyly out these windows at the boy across the street. The furnishings are authentic and the rooms as beautiful as we

could make them. See them without charge or obligation.

ベッキー・サッチャーの家の内部は、一部みやげ物（マーク・トウェインにかかわりのあるものがほとんど）を販売している。まさにトウェイン、トムやハック一色である。このベッキーの家にしても、向かいのトウェインの家にしても、あの「ヘイ」にしても、当時のものがどれだけ使われているか少々疑問だが、しかしそれはともかく、マーク・トウェインが4歳から18歳までの重要な少・青年期をこの町に過ごしたことが、そして彼の名声があの一連の少年冒険物語によってあまりに大きく輝いていることだけは確かである。マーク・トウェインは、いわばこの町の宝であり、ハニバルの人たちの最大の誇りでもあるのだ。

さて、いくつかのみやげを手にし、私たちはもう1つの目的地「マーク・トウェインの洞窟」へと車を走らせた。ジョンストン夫妻はプレゼントだと言って、私にハニバルの絵を刻み込んだスプーンをくれた（これが彼らが私にくれた初めてのプレゼントであった）。

川沿いにノース・メイン・ストリートを南下する。ミシシッピ川上にジャクソン島 (Jackson's Island) が見える。少年たちの夢をかき立てたあの島だ。ハックとジムのしばしの生活が思い起こされるのであった。

道路を右に折れると、洞窟はすぐだった。こんもり茂った木立の合間に洞窟への入り口が見えた。「Mark Twain Cave」と板が掛かっている。入り口の幅は1メートルほどであろうか、割合狭い。一度入ってみたかったのだが、フレッドの時間の都合で、もうクインシーへもどらねばならなかった。でも、あの雄大な物語に迫力を添えた洞窟を前にしたことは幸いであった。トムとベッキーが手を取り合って何日もこの洞窟の中をさまよい歩いたこと、悪漢インディアン・ジョーの壮烈な最期等は、特に読者の印象に残る場面である。足を踏み入れるとすべての者に恐ろしい迷路を提供し、あるいは死を、あるいは命辛々の脱出をハニバルの人々に見せつけて来たこの洞窟も、今ではマーク・トウェインによって世界的な存在となった。が、その迷路の恐ろしさは当時と少しも変わってはいない。マリリンがこんな話を聞かせてくれた。

「今から2年ほど前、3人の少年たちが、トムやベッキーのように、この洞窟の探検目指して、親に内緒で入って行ったのよ。でも、子供たちが夕方になっても帰って来ないので、あちこち探し回した挙げ句、この洞窟に入ってしまったことを知って大わらわ。トムの時と同様、何日も捜索隊が出される。彼らもトムやハックのように冒険好きな少年たちだったのね。……」

しかし、以来2年彼らは二度と親のもとへはもどらなかった。「マクドウガルの洞窟」は、敢然と彼らの挑戦を退けたばかりか、その内に葬り去ってしまったのである。「マクドウガルの洞窟」——「マーク・トウェインの洞窟」、それは今日もなお人々にとって神秘的、かつ危険なところなのである。

大まかではあったが、ハニバル見物を終えて帰路に着いた時、私の頭の中は若干混乱をきたしていた。ハニバルの町やマーク・トウェインに関する数々のものに触れて、何だかまとまりがつかなかったのである。ただ、「あの雄大な冒険物語は虚構ではなかったのだ。生まれるべくして生まれてくる背景が、中西部のこんな片田舎にあったのだ。……」と、心の中で呟くばかりだった。ハックもトムもベッキーもポリーおばさんもシッドも、すべてトウェイン自身の分身ないし彼の知人であり家族だったのだ。ハニバルの紹介文には「ポリーおばさんは彼の母であり、シッ

ドは彼の弟であった。ベッキー・サッチャーは実名をローラ・ホーキンス（Laura Hawkins）といった」とある。……

帰途の車の中で（また今も）、ハニバルの町がいつまでも美しく、トウェインの故郷であり続けてほしいと祈った。バージ（はしけ）の通う、水の奇麗なミシシッピの町であってほしいと祈ったのである。

●クインシーのあれこれ

先ほど、フレッドの都合で、と書いたが、実は彼は午後の列車でシカゴにもどらねばならないのである。きょうは日曜、明日からまた新しい週で、彼は出勤しなくてはならないのだ。きょう皆で一緒にパークリッジへもどるのであれば別だが、私たち——マリリンとフレデリックとクレアと私——は、もう一晩このクインシーに泊まって、明日州部スプリングフィールドに寄って帰ることになっているからである。

ハニバルからもどると、マリリンの弟一家——ロバート（31歳）、妻ジョイス（33歳）、長女メラニー（10歳）、長男ロビー（6歳）——が来ていて、マクアインタイヤ老夫妻の家は、久方振りに大賑わいの昼食となった。その2人の子供は東洋人の私が珍しいようで、じろじろと見つめるのだった。ことにメラニーは私に興味を持ったらしく、私を彼女の通う小学校に是非案内してあげたい、と母親にせがんだ。それで数分後には、彼女らとマリリンと私の4人で出かけたのであった。

それは、ハイランド・リヴァーサイド・スクール（Highland Riverside School）という小じんまりとした緑野の中の小学校であった。もちろん夏休み中で誰もいず、中には入れなかったが、校舎や校庭を一巡りした。生徒は400人くらいで、1クラスは23人から25人くらいとのことである。建物はまだ新しく、メラニーが私を案内したいというわけもわかったような気がした。ただ気になったのは、誰かのいたずらによって校舎の窓ガラスが数枚割られていたことだった。それは明らかに空気銃の仕業であった。こんな美しいのんびりとした田舎町にも、こんないたずらがあるのかと思うと、ちょっとショックだった。

このあと、われわれ一家はクインシーの駅に向かった。名称は「クインシー」駅なのに、場所はミシシッピ川を渡ったミズリー州側にある。小じんまりした中西部の鉄道の駅だ。大きな銀色のディーゼルカーがホームに入っていた。（ホームと言っても、日本の駅のそれと違い、ぐんと低く、いわゆる市電の安全地帯程度の高さである）。フレッドとマリリンは2人だけにしておいてあげたかったので、私はフレデリックと列車の前部の方まで行った。日本のような形のいい列車ではない。むしろぶさいくだ。前部にはBurlington Routeと記されている。日に何十本も出ているのではないので、乗客の数も思ったより多い。

それにしても、たとえ1日にせよ、私のためにこうしてフレッドに迷惑をかけることに私は申し訳ない気持ちでいっぱいだったが、マリリンはむしろ帰りにスプリングフィールドに立ち寄れることを喜んでいるようでもあった。

ともかくフレッドは、元気にその列車に乗った。

その帰り道、マリリンはインディアン・ミュージアムに連れて行ってくれた。昨日ハニバルへ行く途中、このあたりががっつてインディアンとの激戦地だった、ということを彼女が話してくれ

たが、それらのインディアンに関するさまざまな品物が展示されている。ちょっとした博物館である。骸骨、土器、楽器、面、家具等々、豊富に展示されていた。

それからもう1つ、あの高名なリンカン・ダグラス論争の行なわれた地にも、マリリンは親切にも連れて行ってくれた。クインシーの街の中であって、静かな公園となっている。かなり大きな四角い石碑が建っており、そこには、リンカンが聴き入る聴衆を前に演説している様子と、その下に LINCOLN-DOUGLAS DEBATE QUINCY OCTOBER 13 1858 と刻まれている。そしてこの石碑の裏側には、リンカンとダグラスが思想的に袂を分かった象徴的なことばの引用が刻まれている。前後7回に及んだリンカン・ダグラス論争は、今も人々の胸に鮮やかに焼きついており、このクインシーでの演説は6度目の論争でなされたものである。この論争の中心になるものが、この石碑に刻まれた引用にも明白に表われていた。すなわち、連邦維持という点ではほぼ意を同じうする彼らリンカンとダグラスが、奴隷制の問題については袂を分かつたのである。奴隷制は悪とするリンカンと、奴隷制が正しいか間違っているかはどちらでもよいことで、それは州の、地域の住民が決めればよいとするダグラスの間には、まさに政治生命を賭けた論争の火花が散ったのであった。だがこの論争は、ダグラス判事にとってより、むしろリンカンにとって最終的には有利な結果を生むことになった。……

リンカンについてはまた明日スプリングフィールドを訪れた際、いや応なしに触れねばならないので、クインシーにおけるリンカンについてはこのくらいにしておこう。

いろいろと得ることの多かったこの日、フレデリックやクレアに熱心に誘われて、クインシーのプールへ泳ぎに行った。アメリカに来て、プールはわれわれ日本人が羨ましく思うものの1つである。日本でなら、5万や6万の都市で市民プールが1つあるのがやっとな、というのが現状であろう。しかし、パークリッジにしても、このクインシーにしても（人口4万ほどなのに）、プール——しかも設備の整った美しいプール——がいくつもあるのだ。泳ぎながら、何度羨ましく思ったことだろう。中学生や小学生と楽しい一時を過ごしたのだった。

2時間ばかりすると、車で送ってくれたマリリンが、彼女の両親と一緒に迎えに来てくれ、私たち3人は着替えずにそのまま車に乗り込んだ。そしてそのまま家にもどらないで、マクアインタイア老夫妻は私をミシシッピ川のロック・アンド・ダム（Lock & Dam）というダムに案内してくれた。No. 21 と記されていたから、多分このようなダムがほかにもいくつもあるのだろう。そう大した規模のダムではない（というよりきわめて小規模）ので別に珍しくもなかったが、西日がミシシッピの踊る水に光って眩しく、泳ぎのあとの私の素肌に川風が渡って来て、何とも言えぬ快感を味わったのであった。

その帰りには、ドライブ・インに立ち寄って軽食（ホット・ドッグやコークなど）を取った。

「もう20年も前になるかしら。高校時代によくここで友だちと食べたものよ。」と、マリリンはいかにも懐かしそうに青春の一片を大事そうに教えてくれるのだった。

「それからねえエイジ、このクインシーに日本人の来ることなどあまりないわよ。だから、あなたは誇っていいことね。」

マリリンは、私を彼女の生地に案内して来たことによりかなり満足気だった。

「クインシーあれこれ」の最後に、マリリンが昨日話してくれたあの「リンカン・ダグラス・ホテル」は、今日その前を通過すると、売りに出されているようであった。モーテル等の進出で

経営が成り立たなくなったらしい。時代の趨勢には勝てなかったのだろう。

●州都スプリングフィールドとリンカン

クインシーでの楽しい思い出を胸に、私たち3人は翌4日マリリンの実家をあとにした。私たち3人というのは、マリリンとクレアと私の3人で、フレデリックは1週間クインシーに滞在してグランドパーとグランドマーと暮らすことになった。そして来週になったら、フレッドがパークリッジにもどり、今度はクレアが2週間クインシーで過ごすという。

クレアは祖父母と別れるというので、女の子らしくべそをかくのだった。小さな子供にとって、おじいちゃんやおばあちゃんと別れるのは非常に悲しいことで、そういう感情はやはりわれわれと同じなのである。このクレアの涙を何か爽やかに感じた私だった。

さて、私たちのフォードは一昨日来た道路を突っ走り、2時間で州都スプリングフィールドに着いた。何でもマリリンが前もって、この街に住んでいる彼女の高校時代以来の友人に今日のスプリングフィールド案内を電話依頼してくれたらしく、まずはその家を訪ねた。新築のなかなか立派な家で、マリリンも羨ましそうに部屋中見て回っていた。その人ヴォウス夫人 (Mrs. Voth) はなかなか人のよさそうな婦人で、彼女にはマーク (Mark) とジミー (Jimmy) という子供がいて、どちらも愉快的気持ちのいい少年たちであった。

しばらく休憩の後、ヴォウス夫人の車に全員 (6名) 乗り込んで、まず「リンカンの家」に向かった。スプリングフィールドは、いわばリンカンの故郷である。なるほどケンタッキーの生まれではあるが、リンカンを試練の道に立たせ、その名を挙げ、ひいては彼自身が合衆国大統領への道を着実に切り開いて行った、本当の意味での故郷なのである。イリノイ州が“Land of Lincoln”と呼ばれるゆえんであろう。イリノイ州でも特にこのスプリングフィールドにはリンカンゆかりの史跡が散在している。この「リンカンの家」もその1つである。その外観は、いわゆる“an unpretentious brown frame two-story building”である。1844年5月 (当時この家を千五百ドルで購入) から1861年2月、大統領就任のためワシントンに立つまで住んでいた家である。そして彼が自分で所有した唯一の家であるとも言われている。また彼の個人的な出来事——4人の子供のうち3人までがこの家で生まれ (2番目のエドワードはここで4歳で亡くなっている)——もここで起こっている。ともかく20年近くも住んでいたということもあってか、この家を見学する人たち——専門家、一般の旅行者に限らず——はずいぶん多い。かなり大きな建物で、一見しただけで、当時リンカンが弁護士としてどれほど繁盛していたかが推察できる。さらに彼の書斎、寝室、子供部屋、女中部屋等、興味深く見入ったのであった。

ヴォウス夫人は、次にリンカンの法律事務所案内してくれた。ここはもと (1845年当時イリノイ州唯一の) 連邦裁判所のあったところでもある。3階建ての建物で、3階が彼の事務所だったところである。「Abraham Lincoln & William H. Herdon」の事務所」と看板が下がっている。そして事務所の内部は、当時の雰囲気を出すためにうまく繕ってある。彼はニュー・セイレムからこのスプリングフィールドに移って (1837年)、ジョン・T・スチュアートやステイヴン・T・ローガン等と提携の後、1844年にこのウィリアム・H・ハードンと共同で法律事務所を開くに至ったのである。スプリングフィールドへの移住以来、リンカンの身边には全くあわただしくイヴェントが起こっている。イリノイ州の州都がヴァンダリアからスプリングフィールドに移ったの

が1839年、また同年には近い将来の妻メアリ・トッド (Mary Todd) に出会っている。さらに彼らの結婚が1842年、その翌年には長男ロバートの誕生、そして1844年にはこの法律事務所の開設である。(1846年には下院議員に当選している。) 前述の通り、まさに“Land of Lincoln”なのである。

いろいろとリンカンに関するものが展示・掲示されていたが、その中で最も私の注意を引いたものを次に掲げておこう。それは、リンカンが大統領に選出されて住み慣れたスプリングフィールドを去って行くにあたり、市民に寄せた真心籠めた一文である。

President Lincoln's

Farewell Address to his Neighbors

Springfield, February 12, 1861

My Friends:

No one, not in my position, can appreciate the sadness I feel at this parting. To this people I owe all that I am. Here I have lived more than a quarter of a century: here my children were born, and here one of them lies buried. I know not how soon I shall see you again. A duty devolves upon me which is perhaps, greater than that which has devolved upon any other man since the days of Washington. He never would have succeeded except for the aid of Divine Providence, upon which he at all times relied. I feel that I cannot succeed without the same Divine aid and which sustained him, and on the same Almighty Being I place my reliance for support, and I hope you, my friends, will all pray that I may receive that Divine assistance without which I cannot succeed, but with which success is certain. Again I bid you an affectionate farewell.

さて最後に私たちは、オウク・リッジ共同墓地 (Oak Ridge Cemetery) のリンカンの墓地 (The Lincoln Tomb) に詣でた。四方を木立ちに囲まれた広い草地に“with a 117-foot spire, four heroic bronze groups on the corners representing the Infancy, Cavalry, Navy and Artillery of the Civil War, and a ten-foot statue of Lincoln at the south of the shaft above the entrance.”の巨大な大理石の記念碑が天空に向かって伸びている。下部はともかく、その尖塔の部分は、ちょうどワシントンにあるワシントン・モニュメントに似ている。無論、その高さ、大きさという点ではワシントン・モニュメントに及ばないが。

私たちは、他の多くの訪問者たちとともにその狭い入口に足を踏み入れた。この1歩入ったところの丸い天井がすべて白金できていてを知らされ、まず啞然とする。通路を進むと、やがて大理石でできた相当大きなリンカンの棺が横たわっている。そしてそこにはただ一言“ABRAHAM LINCOLN 1809-1865”と大きく刻まれている。若いガイド嬢がいて、マイク片手にいろいろと説明を加える。この棺の安置されている真上の天井がすべて純金できていてを彼女から聞かされたのが、2番目の驚きであった。また、この棺の回りを後から囲むようにいくつもの旗が立っている。何でも、リンカン一族が暮らしたことのある州の旗だそう。棺の真後は、もちろん国旗である。そして印象的なのは、この星条旗の後の大理石の壁にはっきりと刻まれた“Now He Belongs To The Ages”であった。さらにリンカンの棺と相對して、彼の妻メ

アリ、それに3人の息子たちの棺が並んでいる（長男のロバートはアーリントン墓地で眠っている）。

リンカンの死後、直ちに記念碑建立のための募金運動が始められたが、その総額は実に17万3千282ドル（6238万1520円）にも達したという。それにしてもずいぶん豪華なツームである。南部人のリンカンに対する憎悪心を差し引いても、やはり彼が連邦の分離・崩壊の救世主であることは事実だが、今後その生涯はいつそう脚色、神話化されて後世に語り伝えられるであろう。

ヴォウス夫人、マーク、ジミー、そしてマリリンの好意によって、私はリンカンゆかりの地スプリングフィールドを訪ねることができたが、同時に、アメリカ人というのは偉人をずいぶん誇りとし、大切に保存して行くものであることをつくづく知らされた。これは何もリンカンに限ったことではなく、アメリカのどこへ行っても、その土地、その地方、その州にかかわりのある人物が銅像化されているのを見る。そういうアメリカの生んだ偉人にかかわり深いものを残して行くこうとすると見ると、逆にアメリカの歴史そのものの浅さ、若さの証明のようにも思えてならないが、それにしても、古跡、史跡、名所等を山ほど持つ日本も、アメリカのこういう姿勢は是非身につけておきたいものである。過去の遺産が山ほどあるからといって現在のように野放しにしておいたら、それこそ手のつけられない状態に陥ること必至である。

●市役所訪問

クインシーへの旅から帰った翌朝10時からパークリッジの市役所に市長を訪ね、訪問の挨拶をすることになった。車で5、6分だが、この日もマリリンがフォードで送ってくれた。

パークリッジは完全な住宅都市で、工業らしいものなどほとんどなく、一般の民家（前に芝生の庭のついた）が整然と並ぶ、樹木の明るい、美しい町である。ことに市役所付近は緑の木々が茂り、それが市役所の建物にはとても見えず、まるで緑園の中の礼拝堂か図書館といった、何とも言えない雰囲気をかもし出している。

そこで、久しぶりに他のメンバーと出会った。一緒に訪問の挨拶をすることになっているわけである。市長室に案内され、ジョゼフ・ピーコック（Joseph Peacock）市長としばし懇談のあと、新聞記者が記念撮影をしてくれた。（この写真は、8月14日付けのパークリッジ・ヘラルド紙の第1面にデカデカと出た。そして“Mayor Extends a Park Ridge Welcome to Visiting Students”という見出しとともに、われわれの紹介にかなりのスペースが割かれていた。これには私も驚いた。というのは、たかが10人ばかりの日本人がこの市にやって来たからといって、わざわざ新聞に、しかもデカデカとトップ記事として載せるなど、われわれ日本人の感覚ではどうも合点が行かないのである。が、日本とアメリカの新聞の現状を知る時、その驚きや困惑は解消されると思う。周知の通り、日本では朝日、毎日、読売……といった新聞が全国で読まれている。それらによって国民は、国の内外のニュースを一様に知る。しかし、アメリカの場合は事情が少々異なる。なるほどニューヨーク・タイムズやワシントン・ポストなどの有力紙はいくつかある。けれど、それらが前述の日本の全国紙に相当するとは考えられない。やはり大都市を中心とする区域の購読者が圧倒的であろう。では、地方の場合はどうか。ニューヨーク・タイムズやワシントン・ポストを読む人は、全体から見ればものの数ではないのである。その代わり、地方紙が発達している。4万や5万の都市でも10ページ、20ページの立派な新聞を出している。それらの地方紙は、しかしながら、国際的なニュースなどはほとんど扱っていない。その町、その地域のちょっとしたハブニングばかり——どこそこの息子が〇〇嬢と結婚したとか、誰それ夫婦の間に子供が生まれたとか、××嬢結婚等々——が載っているの

る。パークリッジ・ヘラルド紙もこのような類いの新聞である。したがって、この小地域にとって、10人の日本人がホームステイしているということは、やはりビッグ・ニュースになるのだろう。後に皆でフェアウェル・パーティを催したが、この時も、私は気がつかなかったが、婦人記者が来て取材して行ったらしく、後日、同じパークリッジ・ヘラルド紙に載った。）

記念撮影のあと、市長秘書のマリス・トーマス嬢が市役所内部を案内してくれた。次いで、この市役所に付属した市警察の内部をシュロウダー巡査が案内、説明してくれた。取り調べ室、独房、銃置き場等々、日本の警察の場合と大差ないようだ。署員は全部で40名、パトカーは7台あるそうだ。ほとんどが住宅地域だから犯罪の数もそう大したことないだろうと思ったが、そうでもないらしく、手が足りなくて、と彼はこぼしていた。

パトカーの話のついでに、アメリカに来て気づくことの1つにパトカーの車体の色がある。日本なら「警視庁」とか「〇〇県警」と書かれた、白と黒のどうも重苦しいタッチの色彩だが、アメリカではその州、その市によって異なっている。ブラトルボーロでは黒一色だったし、このパークリッジは濃い緑、そしてシカゴ警察は白とライト・ブルーのツートン・カラー……といった具合である。なかなか奇麗なもので、個性があり、一般の目にも堅苦しくなく好感が持てる（その代わり、遠くから見た場合、一般のカラフルな車と見分けがつきにくいので、犯人などには不都合なことが多いだろうが）。

午前中市役所訪問をしたこの日の午後は3時から、メンバー全員があるヴォランティアの家に招かれた。10人ものメンバーを招待してご馳走してやろうというのだから、よほど余裕のある人か、日本人に興味を持つ人なのだろうと喜んで招待を受けたが、一般的にはしかし、こういうことはアメリカではよくあることで、留学生などが週末や休暇の折に友人の家に招かれたりする話はよく耳にする。私たちが招待してくれたキャッセル夫妻は子供がすでに成人して、結婚したり遠くの大学にいたりして、2人だけの生活であること、また庭にプールのあることなどから、私たちが招待してくれたようだ。ともかく、芝生の植え込まれた水色の美しいプールで、私たちは水泳を楽しんだ。個人の家にはプールなどとても考えられないことだが、最近は日本でも、プールを持つことがアメリカにおける1つの流行を成している旨をマスコミは伝えているようである（とすると、このキャッセル夫妻のプールは、その「流行」の走りであったようだ）。

泳ぎのあとは、会社から帰宅したキャッセル氏も加わって、芝生の上でのバーベキューが始まった。何だか貧富の差をまざまざと見せつけられる思いをしながら、食べ放題のバーベキューを楽しませてもらったのであった。

市役所を訪問し、キャッセル夫妻の家に招待されたこの夜も、夕食のあと、ベランダに出て夫妻と語った。私も語りたかったし、彼らも私と語りたかった。

「エイジ、私たちはあなたから日本について多くのことを聞きたいし、またあなたにはいっそうアメリカを知ってほしいのです。それが、私たちがあなたを招いた大きな理由なのです。」フレッドはそう言うのだった。

この夜、私が彼らに語った日本のことはともかく、彼らから聞いた話のうち、気候について次のような文をしたためたので付記しておきたい。

「ブラトルポーロにいた頃、聞いていた話によれば、シカゴのあたりではもっと暑いだろうということだった。だが、どんなに暑いのかとの心配も無駄であったようだ。なるほどブラトルポーロでは、寒いと感じる日が何日もあった。ここパークリッジでは寒いと感じる日はない。しかし、やはり涼しい。日本の夏と比すれば、全く話にならない。特に日陰は日中でも涼しいのである。湿気が少なく、カラッとしているためでもあろう。それに、大きなエルムの木の茂る住宅都市であるためでもあろう。北緯42度という位置に加えて、諸々の原因がパークリッジを快適な街にしているようである。真夏で25～34、5度くらいまで上がるのが普通らしい。

冬についてはどうだろう。冬はこのあたりでは、やはりかなり寒いという。雪は12月に1度か2度降るようだ。そして1月と2月が最もよく降り、3月になると急に少なくなる。積雪量でこれまでの最高記録は1メートル余りだという。普通は大体10センチ前後であるらしい。そして気温は零下4～6度にも下がるという。」

●シカゴの美術・博物館巡りから

クインシーからパークリッジにもどっても、休まずに根気よく見学や訪問に出かけて行った。そのうち、シカゴ市内にある美術館ないし博物館を2、3簡単に紹介してみたい。

パークリッジからシカゴ市内へ行くには、車か、バスか、あるいは家から車でほんの5、6分東の方へ走ったところにあるスコキー急行電鉄（Skokie Swift Service）のスコキー駅からシカゴ行きの電車に乗るか、である。2日ばかりかけた美術館・博物館巡りには、この電車を利用した。

白とダーク・グリーン電車が走り出して30分もすると、やがて有名な高架鉄道（EL）になったり、地下鉄になったりする。この地下鉄の騒音がまた驚異的である。電車の座席に座ってしばらく乗っていると、そのスピードによってレールと車輪の接触が轟音と化し、全く恐ろしいほどである。最初、鼓膜が破れるのではないかと思うくらい、やがて頭が割れんばかりになり、それも通り越すと何だかポヤッとして来るのだ。必然ニューヨークの地下鉄を思い出したが、それにしてももっと何とかならないものであろうか。これでは乗っているのは人間ではなくて、貨物と変わりがないではないか。

ジャクソンという駅で降りて、しばらく歩くと、やがてミシガン湖の青い水の見えるところまでやって来た。対岸など見えるべくもない。水平線が湖と空を一線で画しているのみである。この湖岸の辺りにギリシャのイオニア様式の大きな建物—— Field Museum of Natural History（自然博物館）が立っている。

入場料（25セント）を払って入った正面が大きなホールになっていて、そこには大きな象の剥製はくせいやら恐龍の復元化石などが置かれている。そしてこのホールを挟んだ両側（2階も含めて）が賞賛に値すべき natural history の宝庫となっている。猛獣、鳥類、魚類等々、剥製はくせいにされた世界のありとあらゆる動植物が、描かれたり装飾された背景と調和して、まるで生きているように展示されており、その数量の豊富さは抜群で、アメリカならではの圧巻である。前述の展示品のほかにも、インディアンに関する数々の品、石器時代の標本、内外の珍しい樹木、鉱物等々、目を見張るものばかりである。読者もシカゴを訪ねられた折には、是非時間をかけて（1、2時間ではとても見切れない）この博物館を見学されることをお勧めしたい。

このあと、ミシガン湖岸に沿ってしばらく歩いた。岸に近い湖上には無数の、しかも色取り取りのヨットや小船が浮かんでいる。実に美しい光景だ。前方には、ブルーデンシャル・センターのビルをはじめとするシカゴの摩天楼の林立が望まれる。湖岸のこのあたりは草地も木立ちも豊富なので、ミシガンや摩天楼を眺めたり一息ついたりするのに格好の場である。ミシガンの風が湖上を涼しく渡って来る。そんな中で、人目も^{はばか}憚らずに熱っぽく抱擁を繰り返す男女の姿が目にとまる。アメリカ人というのは、いろんな点でわれわれ日本人を驚かす。白昼、観光客や子供連れの往来するところで激しく抱擁し合ったり、キスを交わしたりしているのに出喰わすことは、まだわれわれの目にはまれなことである。映画のシーンなどで知っているつもりでいても、やはり現実となると興奮させられる。しかし、不思議と不快感は覚えなかった。むしろ気持ちのいい(?) ラブ・シーンであった、なんて言えばおかしいだろうか。ともかく、一緒に行った他のメンバーの若い諸君はワイワイ言って興奮しているのであった。

自然博物館から湖岸沿いに4、5百メートルも北の方へ歩いたろうか。左に折れると、博物館の2階からも鮮やかに見えていた、両側に木立ちの続く美しいハイウェイが、目の前を一直線に走っている。片側5車線、合わせて10車線のレイク・ショア・ドライブである。これを横切ると、有名なシカゴ第一の噴水バッキングガム噴水(Buckingham Fountain)が、その大きな円形の随所からしぶきを上げている。夜になると、噴水にも赤い灯がともされ、背後のシカゴの“マンハッタン”の夜景とマッチしてことのほか美しいそうだ。

私たちはまもなくミシガン通りへと出た。賑やかな繁華街である。この通りに面し、ブルーデンシャル・ビルのすぐ近くに、大きな獅子の像を門柱に仕立てたThe Art Institute of Chicago(シカゴ美術館)を私たちは訪ねた。絵画、彫刻のことは門外漢で何もわからないが、ここにはピカソ、モネ、ルノアールといった数多くの巨匠・名匠の作品が展示されており、感動的なものが多い。

また別の日、やはりスコーキー急行でシカゴのダウンタウンを南下した。今度はずいぶん南下したので、さすがに黒人が目立つ(シカゴは、北へ行くほど上流階級、南下するほど下層階級というふうにかなり整然とした区画が見られる)。ELで目的地の科学産業館に近いところまで来ると、スラムが明白な形を取り始める。高架の両側には、薄暗いレンガ造りのアパートがびっしり立ち並んでいる。それらのほとんどは長い歳月の痛手を被り、しかもほとんど修理されないままのものばかりである。そこを例の騒音けたたましい電車が終日何分おきかに疾走して行く。そんな条件下にある巨大なスラムだ。このような環境にあっては、生活の改善はもちろんのこと、子供のしつけ、ひいては将来の黒人の精神的・肉体的向上ないし改善など期待すべくもない。それどころか、ますます悲観的な様相を呈して行くであろう。しかも、スラムはこのシカゴばかりでなく、他の大都市に大規模にいくつも存在し、この国で最も改善を必要とされる社会問題であるにもかかわらず、ほとんど見過ごされているのが実態なのである。……

ELを降りてバスに乗っても、バスの中はほとんどが黒人である。彼らの顔はどれも苦渋に満ちているようであった。

まもなく、エリザベス女王や日本の皇太子殿下も見学されたことのあるMuseum of Science and Industry(科学産業館)に着いた。そこは、科学的な知識を実に豊富な実例とともにわれわ

れに与えてくれる。鉄道模型、人間の身体構造、宇宙、……と、「科学と産業」にかかわりのある興味深い品々が展示されている。孵化器の中で実際にひよこが卵から孵^{かえ}る様子とか、1ヶ月から9ヶ月に至る胎児のアルコール漬けなどが、特に私に深い印象を与えた。……

美術の専門家でない私には、それらの作品について詳述することなどできないが、それよりもこの美術・博物館巡り、特に科学産業館を訪ねた際に、スラムを目の当たりに見たことの方がずっと深刻な影響を受けた。ニューヨークの摩天楼とハーレム、シカゴの高層ビルや優れた美術館と巨大なスラム、それにしてもアメリカにはこの矛盾の極点が整然と同居している。そして白と黒、この両者はこの大陸に植民が始まって以来、宿命的なギャップを埋めることがないのであるか。

あの地下鉄や高架鉄道の地獄音は、貧富の溝、あるいは白と黒の差別の問題の解決が、遠い将来までも相当困難だというきわめて悲観的予言の象徴として、いつまでも私の鼓膜を打ち続けるのである。

●スター・マーケット

シカゴには日本の食料品を売る店がある。ニューヨークで高い金を払って日本の味に声を上げたことが懐かしいが、そこスター・マーケット（the Star Market）には、日本の食料品ならほとんど何でも揃っている。実はマリリンが「日本の代表的な食事って何？」と尋ねるので、私がいくつか挙げたもののうち、一つ「すき焼き」を食べさせてあげようということになり、スター・マーケットへの買物という運びになったしだいである。

最初は半信半疑であった私も、この店頭立つや開いた口がふさがらなかった。すき焼きの材料である牛肉（アメリカのように厚切りでなく、いわゆる日本のすき焼き用の肉）、葱、萌やし、白菜、椎茸、糸こんにゃく、豆腐等はもちろん、他の野菜、魚、肉、干物、果てはインスタント・ラーメンからインスタント味噌汁に至るまで、日本の店頭でよく目にする商品が所狭しと並んでいるのである。

マリリンが必要なものを選んでほしいと言うので、前述の材料を選んだ。まさかアメリカに来てこんなものにお目にかかり、その上すき焼きを楽しめるなど夢にも考えていなかったのも、それらの日本食の面々に接した時の私の喜びと懐しさはこの上もなかった。そばでマリリンは、大喜びの私を見て口もとを綻ばせるのだった。

ところでこの日の夕食には、ロス夫人（Mrs. Roth）を招待してあった。何でも彼女は、フレデリックやクレアが幼い頃よくベビー・シッターをしていたらしい。彼女の娘が日本の男性と結婚して日本にいるらしく、大変な親日派ということで、マリリンが気を遣ってくれたのだった。手みやげに日本酒を一瓶上げて来ていたのには驚いた。当然すき焼きは知っていて、大満足のようであった。このすき焼きは、無論私を生き返らせてくれた。日本で味わうすき焼きとほとんど変わらない（当たり前だが）ので、アメリカにいることを忘れて、すっかり上機嫌になるのであった。

このように私はスター・マーケットを重宝した。（私自身もインスタント・ラーメンや味噌汁を買って、その後の旅の慰めとした。）そして1度ならず、その後も2度ばかり足を運んだ（そのうちの1度は再度のすき焼きのためであった）。その時にはマリリンはもうよく覚えていて、すき焼きの材

料をほとんど自分で選んでいた。また、店の主人も2度目とあって、顔をよく覚えていた。この主人一家は日系で、もう30年ばかりシカゴに住みついているという。その子供たちはしたがって、当然英語で話すのである。しかし、「日本語がわかるか?」と問うと、「少しはわかるが、英語の方がわかりやすい。」と答えるのを聞いて、当然のことではあるのだが、不思議に思えたことであった。顔や姿を見ていると日本人と変わらないのに、話すことばは英語なのだから実に面白い現象ではある。

それにしても、すき焼き1回分の材料が10ドルないし12ドルもするのに、2度も日本の味を楽しませてくれたマリリンの心遣いには頭の下がる思いであった。

●シカゴ・トリビューンとWGN

パークリッジ滞在中にはいろいろと珍しい体験をしたが、ここでもその1つを紹介してみよう。

新聞のことについては前に少し触れたが、シカゴ最大の新聞と言えばやはりシカゴ・トリビューン紙(The Chicago Tribune)であろう。フレッドの話では、毎日約90万部出しているというからかなり大きい。この新聞社を訪ねたのは、パークリッジに着いて1週間ばかり経ったある快晴の午後であった。ミシガン通りに面し、シカゴの摩天楼群の中でも、青い大空に向かってひときわ伸びているそのビルの最上部には、星条旗が美しくはためいていた。

見学者には所定のコースが決められている。“trip”と称し、まず「新聞のできるまで」の映画を見せてくれる。それからは順路に従って、編集部や印刷部の案内をしてくれる。新聞社の見学には、私が小学校5年の頃学校から連れて行ってくれたが、その当時のイメージとは比較にならないほど、新聞業も現在ではずいぶんと大きく変貌しているようである。映画もカラーで、なかなか見事な記録映画になっており、特にアメリカの雄大な森林地帯からのパルプ材の伐採・切り戻し等の描写は見学者の胸を打つ。

それから印刷部へ行く途中、ガラス張り越しに編集局のオフィスが見下ろせる通路を通る。そこからは編集局員たちが原稿を書いたり、あわただしくタイプライターのキーを叩いたりしているのが見える。壁には“The American Paper for Americans”と“Founded June 10 1847”の印象的なことばも見える。そしてふと、ある机に向かって忙しくペンを走らせている編集局員の足元を見ると、黒人の靴磨きが一生懸命彼の靴を磨いていた。

また、日は違うが、シカゴのテレビ局を見学したことがあった。WGN—TV9 といって、シカゴ及びその周辺部を中心としたテレビ放送をやっているスタジオである。WGNというのはWorld Great Newspaper のことで、すなわちシカゴ・トリビューン紙のことを指す。したがって同新聞社の直営局ということになる。

私たちは、この局から毎日10時半～正午の1時間半生放送されているジム・コンウェイ・ショウ(The Jim Conway Show — Jim Conway は司会者の名前。日本でもこれと同様の番組がいくつかある。)を見学した。テレビスタジオの見学は、私にとってこれが初めての体験であった。この日はジム・コンウェイが休暇を取って休んでいるので、ロバート・Q・ルイス(Robert Q Lewis)がピンチ・ヒッターで司会を務めた。コマーシャル・タイムに合わせて1分1秒を演出するディレクター、照明係、小道具係など、日頃茶の間でくつろいで何気なく笑っては楽しんでいるテレビ番組も実際はいろいろと苦勞があるのだということがよくわかる。それは何もテレビ局に限っ

たことではなく、あらゆる種類の製品の生産過程についても同じことが言えるが……。

さて、ほかにも見学者が多数あって、中でも拍手を要請されると皆一生懸命手を打つ善良な奥様連中が圧倒的に多い。このプログラムが始まってしばらくすると、ロバートは見学者席の方へと歩み寄り、私たち日本人メンバーが来ていることをまず紹介し、カメラも見学者席の方に向けられる。ロバートはインタビューしたいから誰か1人来てほしいと言うので、他のメンバーの要請もあって私がマリリン、フレデリックと一緒にロバートと並んだ。そして少しの間ではあったが、ロバートの質問に答えた。名前を聞かれたり、シカゴ滞在の目的、万博のこと等々、限られた時間内での応答ではあったが、良い体験となった。私よりむしろマリリンが、たいそう興奮気味のようであった。

●ゲイルのこと

生け花のことを話した折、マリリンが非常に興味を示し、是非生けてほしいと言うので、通りを隔てた向かい隣のソレンスン氏（Mr. Sorensen）宅の庭の花を頂戴して生けてみた。茎が細くなかなか難しかったが、何とか生けられた。思いがけないフラワー・アレンジメントにマリリンは大喜びだった。

実はこの日、私のためにマリリンはそのソレンスン氏と彼の娘であるゲイルとを昼食に招待してくれた。彼女はまだ若い、と言っても30歳前後だが、どことなくその表情に陰りが見え、病的な印象を私に与えた。マリリンの話では芸術家だということだったが、いかにもそんなタイプである。なかなかの親日家で、俳句についても少々心得があるらしく、私が同僚に書いてもらった「芋の葉のあごふり合ひて暮るるかな」の色紙をプレゼントし説明を加えると、満足気にうなずいた。そして彼女も私にと、彼女の描いたデッサンのコピーを数枚と、俳句風に自作したという“Butterfly-Dreams”と題した美しい英詩をくれた。

「“pseudo Haiku”よ。」と寂しく笑う彼女だった。

話を聞いているうちに、実は彼女の主人は数年前工事現場で指揮をとって、その時頭上へ物が落ちて来て即死したのだという。それを聞いて、私は鳥肌の立つのを感じた。そのショックでか、彼女はそれ以来数年ずっと家に引き籠もって、ほとんど外出しないという。結婚して間もない事故だったというから、その心中察するに余りあるというものである。初めて彼女に接した時、彼女に憂いの表情が漂っているのを直感したのも当然だったわけである。

「彼女は再婚しないのでしょうか。」

その夜、フレッドとベランダでビールを飲みながら語り合った時、ふとこんな酷な質問を私はした。

「いつか、ね。……でも、まだ夫のイメージを胸に強く焼きつけているようだ。」

ゲイルの再婚話に絡んで、さらにフレッドはこんなことも語った。

「私はマリリンに言っている。もし私が何かで死ぬようなことがあったら、遠慮しないで再婚すべきだよ、ってね。」

隣人の悲劇を直に感じ取ったフレッドのことばだった。実際、人間の運命なんて案外そんなものなのかも知れない。人間ほど強い動物もいないが、同時に人間ほどろい動物もいないのである。フレッドのことばにはそんな実感が籠もっていた。（その後2年経った今もゲイルは再婚してい

ないらしく、「相変わらずひっそりと暮らしている」とマリリンは最近の便りで書いている。

●フレッドの商用旅行

ゲイルを昼食に迎えた日の午後は、フレッドが商用でサンフランシスコへ行くことになっていた。マリリン、クレアとともにシカゴ・オーヘア国際空港 (Chicago O'Hare International Airport) まで見送った。ずいぶん大きな空港である。世界で最も頻繁に飛行機の離着陸する空港と言われる。フレッドは、“one flight a minute” (1分に1便) と言った。そして確かにその通りなのである (このことについては後述)。さらには駐車場の規模といい、その車の数といい、驚き尽くめである。「約3千台はあるでしょう。」と、フレッドが説明してくれた (その実際の収容台数は5千台という)。

さてフレッドは、4時45分のフライトに乗ることになっていた。サンフランシスコでのレンタカーの予約も済ませて、いよいよゲートに入ることになった。彼はマリリンに一時の別れのキスを交したようだった (その時私は横を向いていた)。毎日出勤したり、帰宅した際にはキスを控えてくれている彼らも、4日間の別離にはそっと愛情を示し合うのだった。例によってまた、クレアが今にも泣き出しそうな顔つきでフレッドを送るのであった。

「1分1便」についてももう少し触れておこう。実は、パークリッジにはプールが3つあって、そのうちの1つは私の滞在中に新しくオープンしたものだが、そこへ2、3度泳ぎに行った時にこの「1分1便」を現実として理解した。そしてその直後、「飛行機の発達」と題して次のような小文をしたためた。

「この国における自動車の発達、それも驚異的な成達は、しばしば交通麻痺を引き起こす。全米に渡って、とにかく車、車、車なのだ。一家に2台というのはもう常識である (スラムに住む黒人などはこの常識から外されている)。3台ある家庭も時々聞く。パークリッジは中流以上ということで、まず2台は必ず持っているようだ。……そこで車が飽和状態になって来た今日、人々が長距離旅行をする際には、飛行機の利用が非常に増大している。そして今やアメリカの空、ことに大都市上空は、飛行機で「混雑」しているのである。ニューヨークのケネディ空港でもそうだったが、ここではパークリッジからほど近い (5キロばかり西方) オーヘア国際空港を例にとってみよう。

新しいオウクトンのプールへ2、3度行ったが、そこはすぐ上空が着陸する飛行機の航路になっている。しかもオーヘア空港へはすぐだから、飛行機はかなり低空飛行である。『ユナイテッド』、『TWA』、『ノース・ウェスト』、『パン・アメリカン』等々、大型旅客機が絶え間なくオーヘア空港へ向かって降りて行くのだ。『大きな飛行機だな。』と目で追いながら、それがやがて木立の向こうに消えたかと思うと、またすぐそのあとを追うようにして同じようなジェット旅客機が飛んで来る。(たまに大きなプロペラ旅客機も見える)。何度か計ってみたが、その間20秒きっかりであった。1日平均すると「1分1便」ということになるようである。フレッドとマリリンは、この状態をまさに『社会問題』だと言った。騒音と排気ガスは、今や世界的な問題となってしまった。」

●エマソン中学とイリノイ大学を訪ねて

教師である以上、このホームステイ期間中を利用して学校関係をできるだけ多く見学することは義務であり、また私の強い希望でもあった。マリリンに依頼しておいたら、いくつかの学校にアポイントメントを取ってくれた。その結果、まず8月12日の午前中にパークリッジにある2つの中学——エマソン中学とリンカン中学——のうち、来年からフレデリックが入学する予定のラルフ・エマソン・ジュニア・ハイ・スクール（Ralph Emerson Junior High School）を訪ねた。

夏休みで校内はさすがにひっそりとしていたが、マリリンが連絡を取っておいてくれたので、校長のカールスン氏（Mr. Carlson）が待機してしてくれた。早速彼のあとについて、私とS先生、それにマリリンとフレデリック（彼は前日クインシーからもどり、今度はクレアがクインシーの祖母のもとへ行った）の4人は校内を見学した。1959年創立というからまだ10年、とても新しい学校である。実に広々としている。各教室も十分な広さで、狭苦しさを全く感じさせない。普通教室、タイプ教室、それに各種実習室、体育館等々、皆立派なものである。カールスン校長の説明に力が入ったのも当然である。

見学のあと、校長は私たちを校長室に案内して、そこでいろいろと親切に質疑に応じてくれた。それによると、この中学は2年制で、7、8年生が在学している（アメリカの中・高校は日本のように3・3制のところもあるが、2・4制のところもかなりある）。生徒数625名、教師数40名で、中学としてはまずまずの規模である。ホームルームの生徒数が25～32名、平均27名と少人数である点などは、日本のそれと比較すると羨ましい限りである。

ところで、テキストにおける日本の取り扱いについて聞いてみると、7年生では地理の時間に、8年生では歴史の時間に各々多少教えられている、とのことである。しかし、日本の中学生がアメリカを学んでいる内容とは比較にならない。したがって彼らにとって日本とは、どこまでも「極東」なのである（その証明の1つに、プールなどで中学生や高校生に「東京」や「京都」の地名を尋ねてみたが、知らない子供が多かった）。

クラス編成については「生徒の能力によってクラス分けをしています。」と、校長ははっきりと答えた。この点についても日本の場合と多少異なるようである。進学率は百パーセントだという。さらに外国語としてはフランス語が教えられている（アメリカの中・高校の外国語としては、フランス語またはスペイン語が多い）。

最後に、この学校の生徒が入学した際にもらうハンドブックなるものを覗いてみよう。大体日本のものとよく似ているが、ただ“The seventh grade boys spend a few weeks in home economics; seventh grade girls spend the same time in industrial arts.”という記述は、アメリカならではのものである。また、学校が8時半に始まり、3時15分に終わる、というのも日本とほぼ同じであろう。ただ時間割が40分、8時間授業となっている点が少し違うようだ。

その他、校長は、通知簿がABCDFの5段階評価で行なわれており、FというのはFailing（落第）であるとか、昼休みの時間は40分で、大半の生徒がキャフェテリア（1食45セント）を利用している（もちろん、家が学校に近い者は食べに帰る、という点は日本と同じである）など、具体的に細かく説明を加えてくれた。そして最後に、参考資料にと英語のテキストを所望したら、彼は“Basic Spelling Goals”という7年生と8年生用の各テキストを気前よくプレゼントしてくれたのであった。

同じ日の午後は、シカゴにあるイリノイ大学 (University of Illinois) を訪ねた。この州立大学はキャンパスを3つ持っていて、その1つがこの Chicago Circle である (他の2つは、同じシカゴにある Medical Center, Chicago とシャンペインにある Urbana-Champaign である)。

マリリンの知人でこの大学の英語学部の教授をしているオーグル先生 (Mr. Robert Ogle) がキャンパスを案内してくれることになっていたが、まだしばらく用事があるとかで、それまでの間、代わりに事務員が広いキャンパスを、とは言っても SIT のような広々とした緑野ではなく、全く灰色の多いキャンパスの建物を案内してくれた。3つのキャンパスを合わせて学生総数が4万8千余名、このキャンパスには1万4千人ほどの学生が学んでいる。図書館は立派なもので、特に蔵書数はハーヴァード、エールに次いで第3位を誇っているというから大したものである。また、このキャンパスで1969—1970年度の学生1人当たりの年間授業料等必要経費は358ドル (12万8千8百円) だという。年間授業料は州立大学なので約150ドル (5万4千円) くらいというからさほど高くない。

「私立のノース・ウェスタン大学など、その10倍の授業料が必要ですからね。」と、胸を張って説明する彼であった。しかし、他に書籍代、食費、交通費、保険、旅行費、衣類、洗濯代、娯楽費等々が必要である。それで、このキャンパスで1年間過ごすには最低1,458ドル (52万4,880円) の経費が必要だと推計されている。

いったん教室に入ると、どの部屋もたいてい完全冷房、防音装置、スタンドグラスなど、勉強には最適の条件・設備が整っている。だが、建物の外に出ると、緑の少ない灰色のキャンパスである。舗装にしても建物にしてもすべて灰色だから、この色がキャンパスの大部分を占めており、あまりにも味気ない印象を与える。

やがてオーグル先生が現われて、さらに別の建物をいくつか案内していただいた。そして最後に、このキャンパスで最も高い28階建ての建物へと案内された。これは教授の個人研究室等がある建物で、私たちはオーグル先生が自慢にしているこの建物の一番上までエレベーターで上がった。なるほどそこからの眺望は素晴らしかった。すぐ下には幾重にも重なり合って走るハイウェイが四方八方へと延び、ちょうど鉄道模型のレールの交錯を思わせた。そしてその向こうには、シカゴの摩天楼群が手に取るように望まれた。

オーグル先生自慢のオブザーベーション・デック (展望台) であった。

●レイクサイド・ドライブ

マリリンによると、パークリッジ市には9つの小学校、2つの中学校、それに2つの高等学校がある。それらすべてを見学する時間的余裕もないし、またその必要もないが、とりあえず前述の通りエマソン中学を訪ねたのである。しかし、私の希望はやはり高等学校だけは少なくともつぶさに見学しておきたかった。その切なる願望を実現してくれたのも、やはりマリリンであった。彼女は、パークリッジの高校ではないが、シカゴの北方20余マイルにある高等学校に親友が教師として勤めているので、また素敵なレイクサイド・ドライブにもなるだろうから、と言って、8月13日にそこを訪ねる手はずを整えてくれたのだった。

その日、まずマリリンと私とフレデリックはパークリッジ市の教育委員会 (ここはあの市役所に近く、9つの小学校のうちの1つワシントン小学校に隣接する赤レンガ造りの建物である) を訪ね、教育

長のプリンプトン氏（Mr. Brair Plimpton）に簡単な挨拶をしたあと、シカゴへ直行した。そして、教科書・参考書類を扱うシカゴ最大の書店「チャンドラー」に立ち寄ってもらい、そこで必要な書物を数冊入手して、ようやく目的地を目指すことになった。

私たちはミシガン湖岸を北進した。林の合間にミシガンの青い湖水がまぶしく光り、マリリンの運転するフォードは暑さを払いのけるように風を切る。シカゴ市内の埃っぽい空気を逃がれ、北上するにつれて、車の数もめっきり減り緑が多く濃くなる。ハイランドパークのあたりまで来ると、もう空気は全く新鮮である。ミシガンの水もいっそう青さを増す。それとともにこのあたりまで来ると、誰の目も「家」の既成概念がつぶされることをはっきりと知る。というのは、単なる「家」などではなく、「屋敷」と呼ぶにふさわしい規模の建物が目につき始めるのである。湖岸沿いにそういう屋敷がかなりの間続く。どの屋敷も立派なものばかりで甲乙つけがたい。樹木が生い茂っているので、ただの林と錯覚してしまいがちだが、実は「門があって、そこから、いわゆる母屋の玄関までは50メートルほども行かねばならないくらいの広さ」と言えば、その規模も大方察することができよう。まさに「豪邸」とも言えよう。

「私も一度あんな家に住んでみたいわ。」と、マリリンは漏らすのだった。

彼女によれば、このあたりはシカゴの、と言うよりアメリカでも屈指の金持ち階級の住んでいる最高級住宅地であり、夏はミシガンの涼風と清水を存分に楽しめる別天地、保養地である。また言いかえれば、アメリカの巨大な資本主義体制の頂点に位する人々の居住地区でもあるのだ。ハイランドパークよりさらに5マイルばかり北のレイク・フォレストに至るまでのこのドライブは、私の生涯最高のドライブとなりそうである。と同時に、「私も一度あんな家に住んでみたいわ。」と言ったマリリンのことだが、なぜかいつまでも私の耳元を離れないでいる。

ところで、美しい湖岸にしばしたらずんでみたいという私の願いをマリリンは快諾してくれて、フォードは広い道を外れ、緑濃い林の合間を縫って続く細い道を通り抜け、まもなく雄大なミシガン湖岸へと出た。こんなに雄大な湖とこんなに閑静な湖岸を、私はこれまで知らない。澄んだ青い湖はとうてい湖とは思えぬ大きさと私を圧倒する。琵琶湖が最大の日本ではとても想像することは不可能である。空には雲1つなく、その空の青さより湖の青さの方が鮮やかで深い。マリリンはこういう光景には慣れているのか、車に残って私のもどって来るのを待っていてくれた。私はフレデリックとこの湖岸に立って、新鮮な空気を胸いっぱい吸うのだった。対岸など無論見えようはずもない。あのあたりが対岸のミシガン州なのだろうと、ただ想像してみるに過ぎないのである。まさに海の広がりそのものと言っていいだろう。ともかく湖1つ例に取ってみても、アメリカの土地の広大さが容易に推察できるのである。

この湖岸で注目しておきたいことが2つあった。1つは、この真夏に、この美しい湖岸に泳ぎに来ている人の何と少ないことか、ということである。日本なら、連日水の綺麗な水泳場を求めて人々が大殺到し、その光景はさしずめ芋の子を洗うようなものだが、ここではそんなことはとうてい考えつかない。日本のあの雑踏する水泳場がまるで漫画のごとく思われてくるのである。延々と続くこの砂浜に見られる人影と言え、ほんのわずか（10人もいるだろうか）なのだ。砂の細かい湖岸で日光浴をしている白い水着姿の母親と、真っ赤な水泳パンツをはいた2歳くらいの金髪の小さな男の子が印象に残る程度であった。もちろん、ウィークデイでもあるし、シカゴ市内からは少し距離があるし、おまけにこのような遠方まで出かけて来なくとも、シカゴにしても

パークリッジにしても、その市内に立派なプールをいくつも完備しているし、……というような理由も考えられよう。

もう1つ私の注目を引いたものは、水際近くの^{●●}小石である。ちょっと見ただけでは何でもない砂利くらいにしか見えないが、よく見ると、それらの小石の何と美しいことか！ 大小色取り取り、形もさまざま、眺めていると時の経つのを忘れてしまうほどである。学生時代に訪ねた淡路島の五色浜のことを思い出したが、あの石よりもっと愛着を覚えさせる小石である。そういった美しい小石が水際に沿って無数に横たわっているのだが、待っていてくれるマリリンのことも考え、私は大急ぎでそのうちの特に面白そうな小石をいくつか拾ったのであった。

ミシガン湖岸をあとにして、今度はマリリンの思い出の地レイク・フォレスト大学 (Lake Forest College) に立ち寄った。先ほどの湖岸から車ですぐでもあるので、目的地を目の前にしてはいたが、マリリンは懐古の情を露わにして母校に私を案内したいのであった。車は木々の多い、緑の芝生の実に新鮮なキャンパスへと入った。これが大学なのか、と一瞬わが目を疑うほどで、まるで広い公園か教会堂のある緑地にしか見えない。太い木も多く、その木陰の芝生の緑が、木漏れ日の当たっている芝生の緑と見事に調和して、緑の遊戯さながらである。やはり緑は「生命の色」だ。何かしら人の心を満たしてくれる。あのイリノイ大学のシカゴ・サークルの構内と比較する時、同じキャンパスでもずいぶんと差があることに気づくのである。

これは余談だが、このレイク・フォレスト大学でフレッドとマリリンは知り合ったのだった(彼女は、もう15年も昔のことになってしまった2人の思い出を懐かしそうに私に語ってくれた)。いわば、このカレッジは彼らの縁結びの神だったのである。フレッドは卒業後軍隊に入り、カリフォルニアにいたが、休暇の時など出会う時は、いつも彼と彼女が西と東から車を飛ばして、中間地点のあたり(コロラドかキャンザス)で落ち合ってデートを重ねたのだという。

「懐かしいわ。」と、マリリンは目を細めて昔日を思い起こしているようであった。

軍隊からもどったあと、フレッドは法律学校に入り、弁護士になるべく勉強に励んだ。一方、その間マリリンは特殊学校で教え、彼の学費と彼らの生活費を稼いだのだという。彼ら2人には、そんな甘くて苦しかった思い出があるのだ(アメリカでは、フレッドとマリリンのような例は別に珍しいケースではなく、至るところで見られるようであるが、夫人の発言力も夫の発言力と同程度に強いとよく言われる理由の1つでもある)。何だかマリリンに当てられたような格好でのレイク・フォレスト大学見学だった。

レイクサイド・ドライブが終わって、私たちはドライブ・インのカウンターで軽い昼食を取ったあと、いよいよマリリンの高校時代(クインシー)以来(大学も同じ)の親友アンダースンさん(Miss Anderson)を訪ねることになった。小ぢんまりとした居心地の良いアパートの一室に彼女を訪ねたのは、もう午後でも大分回っていた。久しぶりの再会とあって、彼女ら同期生は大喜びのようであった。彼女をMissと書いて紹介したが、実際まだ独身なので、何でも病身の母親を他の兄弟が誰も面倒を見ながら遠方に住んでいるので、彼女が1人犠牲になってその世話をしているのだ、とマリリンは言ったが、プライベートなことはそのくらいにしておこう。ともかく、このリバティヴィルにまでわざわざやって来たのはほかでもない、この土地にある、しかもアンダースンさんが教師(音楽担当)をしているリバティヴィル高等学校(Libertyville Senior High School)を見学するためであった。

●リバティヴィル高等学校

アンダースン先生のアパートでしばらく休憩の後、私たち4人は彼女のオープン・カーに乗って、アパートから5マイル余り西へ行ったところにあるその学校を訪ねた。昨日訪ねたエマソン中学校も新しかったが、この学校も1953年創立というからまだ歴史は浅い。建物も新しく美しい学校である。

まず校長のホーンバーガー氏（Mr. Hornberger）に紹介されたが、彼の若さ（マリリンによれば、34、5歳くらいだろうという）には全く驚いた。アメリカの教育界では、管理行政面と現場とは別のものであるとの視点に立っている。したがって管理行政面に実力を持っていれば、どんな校長もあり得るわけである（ホーンバーガー氏に限らず、大学においても若い学長——例えば、30歳でシカゴ大学の総長となったハッチンズなど——がいることはよく耳にする）。そのことを知らないわけではなかったけれど、しかし現実にはホーンバーガー氏に接して、改めてアメリカの学校のスタッフ構成を再認識したのである。彼はいかにも行政マンらしく、気持ちよく私を迎えてくれ、十分な見学とそこから得ることの大を期待してくれたのであった。

校内の案内はアンダースン先生が引き受けて、親切に説明を加えてくれた。家庭科の実習調理室、物・化室、普通教室、ラボ教室（フランス語とスペイン語）、図書室等々、どれも皆設備が行き届いている。新しい教室に充実した設備、……日本の公立高校との差があまりにも大きすぎる。アンダースン先生は、さらにキャフェテリア、体育館など校内の隅々まで案内・説明してくれた。キャフェテリアは清潔そのものであり、体育館、家庭科実習調理室、それに外廻り等は、新しい学年を半月後に控え、賑やかに整備・補修が施されていた。新しい上に、広々としているので、伸び伸びした気分になった。

さて校内見学の最後に、アンダースン先生は彼女の最も得意とし、誇りとしている音楽教室へと私たちを案内した。「音楽の部屋は3つあるんです。」と、その直前に口をはさんだ彼女のことが今でも羨ましく私の耳に残っている。まずは楽器室（とは言っても、黒板も備わった立派な教室）へ入る。弦楽器が豊富に揃っている。譜面台が数十個も置かれている。続いてこの隣の部屋が、いわゆる音楽室である。授業の行なわれる教室である。広い部屋なので、グランド・ピアノが小さく見えるほどである。生徒の座る椅子は、後列になるにつれて高くなっている。グランド・ピアノのほかにも金管楽器が並んでいる。さらにはブルーのズボンと赤のブレザーが十数着吊るしてある。いろんな学校行事の際に、生徒がこれらのはでやかな色彩のユニフォームを着て演奏するのだとアンダースン先生は説明してくれる。それから3つ目の部屋が、いわゆる演奏室である。楽団のように指揮台を前に半円を描いて、椅子と譜面台がずらりと並んでいる。以上それら3つの教室を、彼女ともう1人の男性教師とで音楽指導に使用しているのである。これで大体の見学を終えたわけだが、これらの音楽室は無論のこと、例外なくいずれの教室にも小さな星条旗が目にとまったことは付記しておきたい。

一通り校内の見学を終えて、私は改めて日本の学校教育施設との対比をせずにおれなかった。教育施設という点では、かなり水をあけられていることは確かだ。それでは教育内容はどうかであろう。私も教師の端くれだから、やはり高校の実情について同じ英語の先生と話したり、質問をしたりしてみたいと願うのも自然な欲求である。ちょうど英語科主任のオズボーン先生（Mr. Don. W. Osborne）がそのことを快諾してくれた。アンダースン先生にはしばらく待っていてもら

うことになったが、私はマリリンと彼のホームルーム（無論生徒はいないが）に案内された。以下は彼から聞いた説明の主なものである。

生徒数——1,400名，教師数——70余名（うち英語教師13名），1日7時間授業（変則時）で，教師の持ち時間は1日5クラス，カリキュラムでは英語は週に計67時間あって，それらを13名（うち講師2名）の教師が分け持っている。そしてクラス編成は能力別，ミックスの併用で，進学率は60～65%だという。

また，教師の数を科別に書き出してみると，ガイダンス科（3），国語（英語）科（11），外国語科（6），数学科（8），理科（8），社会科（7），芸術科（1），音楽科（2），家庭科（2），体育科（7），商業科（3），職業科（3）というような構成になっている。

教師の俸給についても少し触れておこう。学士で初任給が年俸7千ドル（252万円），修士だと7,630ドル（274万6,800円）である。全米高校教師の平均年俸が約5,500ドル（約2百万円）ということだから，この学校の俸給はかなり良さそうである（俸給の数字は，すべて1969—70年度のものである）。

最後に，オズボーン先生は英語科の授業内容について，実際使用されているテキストを手にとって，いろいろと説明を加えてくれた。そこで，英語科の学年別内容について若干参考に供したいと思う。1年生は文学関係（短篇，詩，小説，劇，随筆）をペーパー・バックの初歩的なテキストでやり，2年生になると主としてアメリカ文学（“Adventures in American Literature”という800ページほどのテキスト使用），3年生では英文学（“Adventures in English Literature”），そして最終の4年生では上級作文，スピーチ，演劇研究，演劇技術，小説研究，世界文学等をやっている。これらのテキストにさっと目を通してみてすぐ気づくことは，その題材，特に文学のそれが，研究とまでは行かずとも，ちょうど日本の大学の英文科の教養課程ないし専門課程で読まれている作品群であるということだ。日本の高等学校の国語のテキストを見れば，母国語である英語のテキストにそういった純文学作品がアメリカの高等学校のテキストに多数入っているのを見ても，別に不思議なことではないのだが……。

説明が終わってオズボーン先生は，それらのうちの10冊余りのテキストを「みやげ」にと下さった。それらについては，またじっくり時間をかけて調べてみたいと思っている。……

この日もさまざまな人々の好意によって貴重な体験をすることができたが，私は彼らの温情の1つ1つをいつまでも大切にしたいと思う。学校見学を終えて，再びアンダースン先生のアパートにもどり，その共同プールで一泳ぎしたりしていたので，パークリッジの家にもどったら8時半を過ぎていた。そして，商用で出かけていたフレッドが，3日ぶりにサンフランシスコから帰っていた。

（ところで余談だが，この日貴重な見学の時間を持たせてくれたアンダースン先生は，マリリンのその後の便りによれば，ついに独身に終止符を打って，1970年の3月に結婚したそうである。）

●ピクニック

ホームステイの滞在期間も4分の3を過ぎたある土曜日の午後，フレッドの勤める会社の主催するピクニックに一家で出かけた。「ピクニックに行こう。」と言うので，私はてっきりどこか野山へサンドイッチか何かを持って出かけるものだと思っていたが，その想像は全く外れた。われ

われが想像するそういうピクニックとは大分趣を異にしていた。というのは、前にも紹介した通りフレッドが弁護士をしている大きな製薬会社が、土曜日の午後を利用して、その社員並びにその家族を招待して歓待するものであることがしだいにわかって来たのである。

会社に着くと、その大きな本館近くにはすでに多くの車が駐車していた。そしてピクニックの催し物は始まっているようであった。本館の前が、木々も高く茂る非常に大きな庭になっており、この緑の草地に大テントが張られ、ベンチが置かれ、食事が出され、あるいはまた広い草地のあちこちではゲームなども行われている——いわゆる会社の主催する慰安会、それがピクニックなのであった。

受付で、フレッドは名前を言って4個の名札を手にし、そのうちの1枚を私にも手渡した。それには“—— Circle Picnic EIJI TSUJII”と印刷されていた。明らかに私の参加をも見込んで、フレッドが家族の一員として予約しておいてくれたのだ。何度も書いたが、できる限りいろんな体験をさせてやろうという彼らの厚情には全く頭の下がる思いであった。

さて、まずテントの方へと進み、そこに並んでいるサンドイッチ、ハンバーガー、ホットドッグ、アイスクリーム、パイ、……など、自分の食べたいものを欲しだけ取り、ベンチに腰を下ろして昼食をエンジョイしたのだった。フレッドによると、1,500人余りの人が来ているだろうというから、とにかく大変な数である。大テントの中は食事をする人たちでごった返していた。そんな中で、フレッドは顔見知りの人や同僚と出会う度に、私を彼らに紹介することを忘れなかった。

食事が済むと、ゲームを10種類ばかり楽しんだ。10種類で300点満点になっていて、男子なら150点以上、女子なら120点以上取ると、賞品をもらえるというものである。私たち4人——フレッド、マリリン、フレデリック、そして私——は、腕を競い合ってこの10種類のゲーム（玉ころがし、輪投げ等々）を順を追って消化して行った。久しぶりに童心に帰って、私たちはそれらのゲームに興じた。そしてその結果は、他の3人が失格だったのに対し、私は幸運にも180点を取って賞品を獲得した。賞品そのものはキャンディの詰め合わせだったが、フレデリックが子供らしくいつまでも羨望の眼で私を見つめていた。

それにしても、「ピクニック」ということばの概念が、われわれにはずいぶん狭義に理解されているのを知って、少なからず驚いたことであった。

その日の夕方、夕食を終え、一家でパークリッジの街中をぐるりと一回りしようということになった。無論車ではなく、自転車に乗ってである。自動車王国に自転車など、と思われるかも知れないが、実際ジョンストン一家は4台（つまり1人に1台）所有している。クレアがクインシーの祖父母の家に行っているのだから、ちょうど私も含め4人で夕闇迫る市内を散歩(?)できたのである。ジョンストン一家のみならず、たいていの家庭に1台や2台の自転車はあるようで、特に子供たちには欠かせないもののひとつになっている。自動車ばかりがいやに目につくこの国でこうして自転車を乗り回すことは、時代の流れに逆らっているようで、何か新鮮で小気味よい気分になれるのだった。公園や小学校の校庭で自転車に乗っている子供たちの姿を見かけると、何だか面白く嬉しい気分さえなってしまった。

30分余りもあちこちと走り回っただろうか、汗がじっと滲んで来るのを覚えた。そして夕方の

冷気と涼風は、ペダル（アクセルではなく）を踏んで汗ばんだ者にしかわからない清涼剤のように思われたことであった。

●日曜礼拝とストックヤード

一度日曜礼拝に行ってみたいと頼んでいたところ、8月1日にパークリッジに来て以来初めて出席することができた。ホームステイも残り少なくなった8月17日のことである。フレッドやマリリンは日曜ごとには出かけていないようで、時間がある時や行きたいと思った時だけ出席しているようである。

いづどこへ行くにも普段着で出かけていたので、ついこの朝もそのままでもいいものと思っていたら、教会へ行く時だけは正装して行く必要があることを知り、パークリッジに着いて2度目（最初は市役所に市長を訪ねた際）のスーツ着用ということになった。フレッドはもちろん、フレデリックですらいつものラフな格好はしていなかった。

さて“The Park Ridge Community Church”という市役所に近い、小ぢんまりとした建物が私たちの教会であった。どんな場合でもそうだが時間励行は大したもの、10時きっかりにオルガンの前奏曲が教会内に厳やかに響き渡り、やがて礼拝が始まった。正式に礼拝に出るという経験は初めてだったので、少し堅くなったようである。まもなく Praise and Adoration（お祈り）があり、続いて Hymn of Praise（讃美歌）で声高らかに歌い、それが終わると今度は説教で、Joan Edwards 牧師（女性）が説教壇に立ち、声を大にして“Salty Christians”（「マタイ伝」）を延々と続けた。そして1時間ちょうどでこの朝の礼拝は終わった。

この礼拝で気づいたことは、敬虔な若い娘さんなどいることはいたが、しかし出席者の大半は年輩、それも老人がずいぶん目についた点である。

「アメリカ人は毎日曜日ちゃんと礼拝に出席しないんですか？」と、私は既成概念を再確認するようにフレッドとマリリンに尋ねた。

「最近ではさぼる人が多くなったわねえ。」と、マリリンは答えた。そして、特に若い世代で日曜礼拝を嫌ったり拒否したりする傾向があることも付加した。前述のごとくフレッド一家もやはりそうであるらしく、彼らに限らず、これは全国的な傾向であると言えよう。

礼拝からもどって、昼食にサンドイッチを取り、午後のスケジュール消化のためシカゴへと出かけた。私の希望したストックヤード訪問と、一家の好意によるプロ野球観戦がその目的であった。

4人の乗ったフォードは、シカゴ市内をかなり南下して、先日訪ねた The Museum of Science and Industry の近くで赤レンガの煤けた古いアパートがいやに目につく貧民街の間を縫って走った。前述の通り、シカゴの街は北に行くほど上流階級・白人が住み、南下するほど下層貧民窟が目立ち、黒人の数もぐんと多くなる。シカゴとはそういう貧富の差が相当明瞭に出ている街なのである。そんな後者の中にストックヤードは今も残存していた。

私たちのフォードが止まったところは、鉄道の引き込み線のそばだった。ここが有名なストックヤードなのかと胸熱くしたが、予想通りやはり気持ちはなかつた。これがその昔、テキサス、オクラホマあたりに幾百万頭となく群を成していたと言われる野牛が、カウボーイたちによってウ

イチタやダッジシティやカンザスシティまで運ばれ、そこから鉄道で次から次へと輸送されて来ていたという、そのストックヤードの現実の姿なのであった。

「現在ではその当時の10分の1の規模になってしまった……。」と、フレッドは言った。当時の面影を残すもの——囲い地、鉄道のレール、……——が儂い姿を小さいながらに今も留めている。軌道が3本ばかり入って来ているが、いずれも錆びついて、枕木と枕木の間からは夏草が吹き出すように生い茂り、レールを数ヶ所ですっかりおおってしまっている。そして一抹の寂寥感と共に、時代の任務を終えた一種の休らぎのようなものがそのレールと、半ば土に埋もれた灰色の枕木の1本1本に感じられる。これらの鉄路がかつては何万、何十万頭という野牛を西部の原野からここの屠殺場へと送り込んで来ていたことを思うと、それらの遺物に淡い感懐も残る。

私たちは車を置いて、囲いの柵の方へと進んだ。HOGSとかSHEEPとかCATTLEの標識が畜舎の前に立っていて、家畜特有の悪臭が鼻をつく。なるほどそこには相当な数の家畜が集められている。そしてこれらの家畜を区分けして入れてある大きな畜舎を過ぎると、そこに大きな囲いの柵が現われた。ずいぶん広い囲い地である。屠殺されるまでの間、牛が入れられておくところだ。昔はもっともっと広大なものだったらしいが、今はすっかり寂れ切ってしまった感が強い。それでも、鉄道に代わって、赤い大きなトラック（10輪と18輪！）が2台止まっていて、ちょうど牛が次々に降ろされて、この囲い地の中へと追われているところだった。そうだ、鉄道はもはやその必要性をほとんどなくしてしまったのであり、代わってこうして大きなトラックが主たる輸送手段となったのである。

今や、シカゴだけが屠殺・製肉をやっているのではない。それは昔日の一過性であったに過ぎない。西部が開拓・開発・発展を続けるにつれ、デンヴァーのような大都市が誕生し、屠殺・製肉はもはやシカゴの専売特許ではなくなってしまった。鉄道でわざわざ数百キロものプレイリーを越えてシカゴまで輸送して来る必要がなくなったのである。シカゴは、主としてその350万すべての人々とその周辺地域の人々の食肉を製産すれば、それで事足りるのである。このストックヤードの衰退は、自動車や飛行機等の著しい発達、それに地方都市の目覚ましい成長によって拍車がかげられたと言える。しかし今日なお、牛ばかりでなく幾多の家畜の屠殺の総計が年間1千万頭にもものぼると言われるこのシカゴが、その規模において昔の10分の1程度に縮小したと言われれば、当時の盛況はまさに想像を絶するものがある。

●ホワイトソックス対ヤンキース

ストックヤードの現状を垣間見て、次に私たちはそこから5、6分のコミスキー・パーク（「パーク」は無論「公園」ではなく“ball park”，すなわち「球場」のことを言う）を訪ねた。ストックヤードからさほど遠くない、同じようにごみごみとしたスラム街のど真ん中にある球場である。そんな中であって、その白い外観はこの地域の花になぞらえることができるだろう。照明塔が見えるので野球場だとすぐわかるが、近づいてその白い外部だけから判断すれば、普通の建物にしかな見えないうだろう。正面入口の上に書かれた“White Sox Park”の赤い文字が、その「白」の上に鮮やかであった。

2時試合開始と決まっている（Week Day & Sun. Single Game —2:00p.m. Sat. Single & Sun. Doubleheader —1:15p.m. TWI-NIGHT GAMES —6:00p.m. NIGHT GAMES —7:30p.m.）ので、観客がぼつぼつ切符

売場が集まって来ていた。フレッドが4人分の内野席券(1人1ドル50セント, 540円)を買って来てくれた。その入場券は日本のように薄くてだだ広いものではなく、国鉄切符より少し大きい程度(厚さは国鉄切符より少々薄いめ)の藤色のもので、そこには日付だけが赤で、あとはすべて黒で印刷してある。またRAIN CHECKと題して次のような文字も並んでいた。面白いので添えておきたい。

"If less than 5 innings (or 4½ innings of the White Sox are ahead) are played on this date, this coupon may be redeemed for cash, or exchanged for a ticket of the same price, if available, for a regular championship game during this season. No refund will be made after December 31, of current year, and after said date all rights hereunder are cancelled and this coupon is void. No exchange or refund except as above."

さて私たちは内野席に着いた。一見して日本の野球場と少し違うと感じたのはスタンドである。普通日本の球場だと、せいぜい内野席の一部に屋根があるくらいだが、この球場は内野はもちろん、外野席に至るまで、バックスクリーンを除けばすべて2階席まであり、しかもすべて屋根がついているのである。したがって、球場全体が少々暗い感じがなくもないが、それでも降雨の際など傘をささねばならない日本の場合と比べると、やはり羨ましいと思う。観客が降雨とともに傘やカッパや新聞紙をいっせいに頭上にさしたり載せたりする日本のスタンドの光景が、滑稽に思われてくるのであった。

内外野ともにすべて2階席まであるこの大規模な球場にはとにかく驚いた。定員も恐らく10万人近いだろうと推察されるので、まず観客で埋め尽くされることはちょっと考えられない。おまけに(この当時)ホワイトソックスは成績が悪く、当然のこのようにあまり入っていなかった。内野席の1階だけがほぼいっぱい入っている程度だった。

グラウンドに目を向ける前に、まずスタンドに目を向けてみよう。特に目につくのは、日本でも同じように売り歩くコカコーラ売りである。日本では「えー、コーラ、コーラはいかが!」と声をかけるのに対し、こちらは"Coke! Coke!"である。それから、アメリカ特有のハンバーガーとホットドッグ、特にホットドッグを売り歩く老人や若者の声と姿とが印象的である。

コークを飲んだりしているうちに、まもなく国歌吹奏とともに試合開始、ホワイトソックスのナインが守備位置に散った。対する相手はニューヨーク・ヤンキースである。内・外野の選手の1人1人が浮き出んばかりに見える。それほど芝生の緑の美しさが印象的で、この点は日本の場合とあまり変わらない。

さて、1回の裏、ホワイトソックスの攻撃で1点が先取されると、観衆の声援は興奮を帯び始める。続いて3回にも1点を追加して2対0とリードした。"Come on, Williams!"とか"Let's go!"の掛け声が、ヒットが出たり人気選手がバッター・ボックスに入ると、爽やかな木霊となって大きな球場のスタンドの谷間に余韻を残して響き渡る。バックスクリーンを除けばすべて2階で、しかも屋根がついているので、グラウンドがちょうどちょっとした谷間の底のようになっていて、声援がまたそれまで黙っていた観衆までエキサイトさせ、いっそう大きな声援となって行く。選手を誰1人知らない私ですら、一緒になって声援を送りたくなるほどであった。

そのうちヤンキースは反撃に出、4回にホームランを含む2点、7回には3点を入れ、結局5

対2と逆転勝ちした。非常に好ゲームであった。普段冷静で、口数もどちらかと言えば少ないフレッドまでがかなりエキサイトしていた(ことを今ふと思い起こすと、口もとが綻ぶ)。ホワイトソックスが負けたので、3人とも、特にフレデリックは悔しがっていたが、彼らのひいきチームはシカゴのもう1つのチーム、シカゴ・カブスなので、諦めも早かった。何しろ、彼らのカブスへの力の入れようは大変なものである。(おまけにこの当時、カブスはリーグのトップを走っていたのだから。)例えば、フォードのバンパーにだったか、カブスのシールが貼ってあったのを思い出す。ともかく、アメリカ3大スポーツ(他はフットボールとバスケットボール)の1つ、野球の人気は聞いていた通りのものであった。

野球観戦を終えての帰途、私の好きなミシガン通りを通り、シカゴ摩天楼中最もユニークに聳えるマリナ・タワー(Marina Tower)を見て来た。正確にはNew Marina City's Twin Towersと言うらしい。私が口を挟むまでもなく、絵はがきが面白い説明を載せている。

"Newest addition to the Chicago skyline is this 60 story apartment house with lower floors serving as ramp garage. Along with housing, a wide range of commercial and recreational facilities are provided, including a marina with ships to accommodate 700 boats. The New Marina City's Twin Towers have been called Chicago's most amazing structure since the 1893 Ferris wheel."

なるほどユニークなスタイルで、一目でそれとわかる建物である。ちょうどトウモロコシが2本、シカゴ市街の中心に突き立っているようなその姿は、まことに面白い建築物である。Twin Towersというのもまた面白い。どれも似たり寄つたりの高層ビルのうちで、このマリナ・タワーだけは、シカゴを訪ねたことのある人々の記憶に長く残ることであろう。

●フェアウェル・パーティ

8月21日の朝に私たちはバスでシカゴを立つことになっていた。その日も目前に迫った19日の夜に私たちメンバーは、フェアウェル・パーティを開いて、お世話になった家族を招待することにした。その相談のためにメンバーが久しぶりに集まった15日の夜、先にプラトルボーロでも行なった経験を買われて、私が再び司会の役を受け持つこととなった。

その当日は、朝早くから実に多忙な一日であった。8時過ぎから数人でスター・マーケットを訪ねた。パーティの品物を揃えるためである。S・I・Tの時には余興だけだったが、今度はメンバーが各家族にずいぶん厄介になったこともあって、ささやかながら腕を振って和風料理も同時に楽しんでもらおうという段取りにしたのである。15日の夜集まったのは、役割を決めること、料理をどんなものにするか、余興のプログラムは……といったことの相談であったのだが、その結果、料理としては天ぷら、わかめの味噌汁、そうめん、塩揉みなどを中心に作ろうということになっていた。そして天ぷらの材料には、茄子、玉葱、ピーマン、人参、薩摩いも、エビ、海苔、イカ等で、それらが揃えられるのはスター・マーケットを置いてほかに考えつかなかった。メンバーが11名、その家族が約4、5名として、約60名分の料理を準備しなくてはならないのだから大変である。そういうわけで午前中は、この買い出しであつという間に過ぎてしまったのだ。

ところでパーティ会場は、先日一家4人で日曜礼拝に出かけた The Park Ridge Community

Churchのベイスメントである。近頃どうもベイスメントというのに縁があるが、しかし日本人のイメージである「地下室」とはおよそほど遠いことを重ねて述べておきたい。この教会のベイスメントも実に立派なものであった。最初、フェアウェル・パーティを教会の地下室でやることになったのを耳にして、実のところ私もあの日本的「地下室」のイメージを脱することができなかった。しかし、買物を終え、材料を抱えてその教会の勝手口からベイスメントへと階段を降りて行くにつれて、そういうイメージは崩れ始め、やがて安堵感さえ伴うようになり、そのホールと備えつけられてある簡易調理室(とは言っても、調理台、流し台、ガスコンロ、冷蔵庫の揃った)まで見た時にはさすがに驚いてしまった。さらにホールには大型円型テーブルが置かれ、しかもステージまでが完備しており、パーティを開くには申し分のない会場である。その片隅には、ここにも例の星条旗が立っていた。こんな立派な会場でパーティを開き、しかも司会を仰せつかった私としては、何が何でも成功させたいという気持ちがいっそう強まり、早くも少々興奮気味であった。泣いても笑っても明後日はこのパークリッジとの別離が待っているのだと思うと、各メンバーの準備の手にも力が籠もった。

午前中にいちおう手分けしてご馳走の材料及びその他の必要品を買い揃え、午後は1時からいよいよ準備に取り掛かった。ホールについてはテーブルの配置、テーブルクロス、ナイフ、フォーク、スプーン、箸の用意、余興に必要な長机、椅子の準備、また料理については前述の幾種類かの材料を切ったり、揚げたり、茹でたり、煮たりで、てんやわんやの多忙を極めた。5名や6名分の天ぷらならわけないが、60名分となると、油だけでも一缶では間に合わない。全く汗だくの数時間であった。メンバーは日本の各地からの参加者で、したがってこの訪米の機会を得るまでは全く面識もない者同士だったが、11人ともこの時ばかりはよくもこんなにチームワークよろしく事を運べたものだ(と、今思うと爽やかな気分さえ生じる)。ともかく四苦八苦の果て、ようやく5時頃には何とかめどが[・]つ[・]いた。

私は一度家に帰り、フレッドに頼んで花屋へ車を走らせてもらうことにした。S・I・Tの時もそうだったが、今回も何か花を生けてくれとのメンバーの依頼があったのである。日曜日でいくつかの店に電話を入れてくれたが、休業しているところが多かった。一店だけまだ開けているというので、大急ぎでその花屋を訪ねた。プラトルボーロの花屋に行った時もそうだったが、ここでも花はかなり高い。時間もなかったなので、大急ぎで菊やカーネーションなどを見繕った。

さて、何とか花も揃い、他のメンバーの「出し物」の用意もできたようなので、そろそろ肝心のフェアウェルパーティの話に移ろう。各家族には午後7時に、とメンバーから伝えてあった。感心したのは、11の家族の到着が多少の差はあれ7時には全員揃ったということである。時間厳守、それはアメリカ人の個人の尊厳を守るというエチケットであり、社会的ルールの1つであり、その徹底はさすがである。現在の日本のようにやれ民主主義だ、やれ自由だと、自分の利得だけを主張しては、真の民主主義、個人主義の理解と実現はほど遠いように思われる。「時間厳守」という1つの良識が習慣として根付いてこそ、そこに自らの自由や権利もまた獲得されるはずである。つまり「時間厳守」こそは、民主主義、正しい個人主義への第1歩であろう。書物や人に聞いてはいたが、その徹底を直に見て、その必要性を日本人として再認識し痛感したのであった。

10分や15分前に来た人たちは待合室でしばし談笑の時を持ち、親しい挨拶や家族の紹介などが

行なわれた。フレッド夫妻とフレデリックも正装して時間前に来てくれた。無論“Thank you very much for inviting us.”のことばを忘れなかった。さらに「司会の成功を祈る……」とも言ってくれた。私がこの夜ジム・コンウェイ（先日訪れたWGNのテレビ番組“Jim Conway Show”の司会者）のようにmaster of ceremonies（司会者）をやることをすでに数日前に知っている彼らはそのことを非常に誇りにしてくれ、同時に期待してくれているのである。

まもなくテーブルに着いた人たちを前に、私はステージに立って語り始めた。

“Good evening, ladies and gentlemen. How are you?”

すると“Fine, thank you.”と、あちこちから小さな声が返って来た。

“Thank you very much for coming to our farewell party. I'm Eiji Tsujii, you know, and I'm going to take a part of Jim Conway this evening. ……”

そこまで話すと、いくつかの円型テーブルに着いている家族たちが拍手と笑いを送ってくれた。私は自分の意図するユーモアが通じたことを素直に喜んだ。

それからS先生を紹介し、開会の挨拶をしてもらった。そして食事となった。私もフレッドたちの席に行って食事をともにした。盛りつけられた天ぷら、そうめん等が苦心の午後を思い出させた。皆食べつけていないので、中にはそうめんはどうも食べられない、という人もいたが、概しておいしそうに、また珍しそうに日本食(?)を口にしてくれた。特に、箸の使い方やそうめんの食べ方が見ていて微笑ましかった。

食事もそろそろ半ばを過ぎて終わりに差し掛かる頃を見計らって、私は再びステージに現われ、我々のささやかな余興を案内・説明し始めた。プログラムの最初はflower arrangementとtea ceremonyである。時間の都合上この2つは併行してやることにした。長い机をステージまで持ち出し、客席から向かって右側に私の生け花、左側に京都のKさんのお茶の披露が始まった。私はいったんみやげとしてフレッドにプレゼントした浴衣を拝借して着用、Kさんも同じく白地にピンクの花柄をあしらった浴衣を着て、それぞれ任務に就いた。盛花に適当な花がなかなか見つからなかったので、自分の気に入ったように生けるのはやっかいだが、それでも日本の生け花をできるだけ理解してもらうために汗だくで生けた。何とか生け終わって家族の方に花の正面を向けると、途端に大きな拍手が沸き起こった。まだ習い始めて1年半ほどの未熟な私の生け花に盛んに拍手を送ってくれる人たちの心が嬉しかった。無論、華道の説明も簡略ながら添えておいた。一方、Kさんはお茶を立てて、一服いかが、と家族に勧めていた。好奇心に溢れる人たちはやって来て、顔をしかめながらお茶を飲む。その様子もまた楽しいものであった。

それが終わると、今度は私と同じ京都の短大生Fさんと金沢市のM夫人とが日本舞踊「さくら」を披露した。美しい着物姿がここではいっそう引き立って、家族の間からも思わず“Beautiful!”が洩れた。それからそのあとは東大生のOさんによるバイオリン独奏で「春の海」がホールいっぱいに響き渡って家族を魅了した。日本人であるがゆえに日頃返ってあまり落ちていて耳にしない「さくら」や「春の海」のメロディーを聴いて、心打たれもしたのであった。

それから民謡踊りが行なわれ、パーティのプログラムもいよいよ押し詰まって、私たちは全員で日本の歌をプレゼントした。曲目はS・I・Tの時と同じものとした。それらの歌を声いっばい歌っていると、あの時のフェアウェル・パーティが必然懐かしく蘇り、ジムや中南米の学生たちの顔が浮かんで来るのだった。

私たちの歌が終わると、今度は家族の人たちにアメリカの歌をいくつか歌ってくれるように注文した。すると、どこからともなく歌が飛び出し、それに合わせて大合唱が始まった。それらは“Old Mill Stream” “Home on the Range” “I’ve Got Sixpence”であった。これらの歌が終わってデザート西瓜を皆で食べ、メンバー全員が再度ステージに上がって「赤とんぼ」を歌い、最後に60余名の大合唱“Auld Lang Syne”（「蛍の光」）で打ち上げとした。ちょうど2時間のパーティであった。

終わりを宣すると、どの家族も私に握手を求め、このパーティの大成功を祝福してくれた。小さなフレデリックも“Congratulations!”と喜んでくれた。一般に誇大表現と言われる世辞の部分を差し引いても、それらは私の疲れた身心を癒してくれた。

こうして家族が帰って行ったあと、私たちは急いで大量のあと片づけに取りかかった。1時間半ばかりもかかってそれも何とか片づいた。素晴らしい交流となったフェアウェル・パーティのことをメンバーはそれぞれの脳裏で反芻しながら片づけの仕事を続けていたようだった。

片づけがすっかり済んだので、家に電話したらフレッドがすぐに迎えに来てくれた。他のメンバーも同様にまた各家庭へと夜の中に消えて行った。家にもどったらもう11時前で、マリリンもまだ寝ずに起きて待っていてくれた。2人はパーティの興奮から醒め切っていないようで、それをほめことばに変えて私に何度も返してくれた。パークリッジの夜も11時を過ぎるとさすがにもう静寂だけがはびこり、深い眠りに入りつつあった。私もフレッドとマリリンにお休みの挨拶をして自分の部屋へともどった。床に入ってもすぐには寝つけず、パーティが絵巻物を見るように次から次へと脳裏を駆け巡るのであった。

（余談になるが、私たちがシカゴを去った8月21日から1週間後に、パークリッジ・ヘラルド紙は次のような記事を3枚の写真をつけて大きく報道した。親切にもマリリンがその部分を切り取って、日本にもどった私のもとに送って来てくれた。ベティ・スタチヨという婦人記者による記事で、私たちの催したパーティに対する見方、受け取り方、その英語表現が興味あるものなので、ここに一部紹介しておこう。

Student Visitors Thank Ridge Hosts with a Japanese Dinner

An air of eastern serenity pervaded the “Thank you” dinner for their host families prepared and served by the 11 Japanese visitors to Park Ridge on Tuesday, Aug. 19 at Community Church. Tempura was the featured course, and consisted of meat, fish, potatoes, sweet potatoes, burdock and other vegetables. These had been breaded and cooked and then cooled. They were served with a thin soy sauce for dipping. A salad called somen was next. It consisted of cooled cooked spaghetti, topped with slices of tomatoes and greens. This was taken with chopsticks and placed into a cup of liquid dressing by each diner and then eaten. (Quite a mean feat, even using a fork.) Hot soy bean soup accompanied the meal.

The students and their leader, S (S先生) all wore Japanese dress during the dinner. Afterward they presented a program. White, red and yellow chrysanthemums were arranged in a classic design by Eiji Tsujii. The Japanese tea ceremony was also performed and bowls of the hot green tea were served to the assembly.

Two girls did a classical Japanese dance to the tune of an oriental recording. Miss O. played “Haru No Umi” on her violin, which means “The Sea in Spring”. The beautifully decorated dancing fan and

long rectangular sleeves of the dancer were focal points of the dance. The sleeves were alternately held and twisted and then permitted to hang down, during the slow dance movements.

A folk dance was performed by two young women wearing the straw hat of the field workers of Japan. After this the entire group sang five folk songs. By the time they came to the third number, master of ceremonies Eiji Tsujii came down from the stage and enlisted the aid of Foreign Exchange Student K. S. of Tokyo, who will attend Maine South this year.

An audience participation song was next, punctuated by hard clapping, foot stomping and back slapping.

The singers finished to hearty applause by the audience and then asked to hear American songs. ……)

●パークリッジ雑感

フェアウェル・パーティも滞りなく済ませた翌20日はほとんど何もしないで、明日から再び始まる長旅に備えて休養を取った。そして、マリリンやフレッドとさらにいろいろと話し合ったり、思いつくままにエッセイをまとめてみたりした。20日間の思い出、アメリカとアメリカ人に対する質疑応答は尽きなかった。それらのいくつかを「雑感」として整理しておきたい。

日本人は概して若く見られるようである。私などは25歳（当時）にもかかわらず、高校生と間違えられる始末だった。その好例として、この夏ずいぶんと泳ぐ機会に恵まれたパークリッジのプールでの1コマを紹介してみよう。

どこのプールでもそうだが、小学生や中学生など未成年者は規定に従ってある一定時間水に入ると、笛の合図によって必ず水から上がって休まなければならない。元気いっぱいの子供たちは、その笛を恨めしそうに聞きながらプールサイドに上がって陽光を浴び、次の笛の鳴るのを今か今かと待ち兼ねる。そして次の笛が鳴ると、一斉に元気よく水に飛び込むのである。なかなかよくそのルールが徹底されている。それもそのはず、プールサイドのいくつかに見張り台があり、Guardと称するアルバイトの大学生がサングラスをかけて文字通り見張っているからである。無論、危険防止・救助のためもあるが、このサングラスの兄ちゃん、姉ちゃんたちは小さな子供たちにとってかなりの効果をあげているようだ。

ところで、休憩時間に子供たちがプールサイドに上がっている間も、大人は泳いでいることができる。むしろ子供たちが一斉に上がって人気のなくなったプールで、大人は悠々と泳ぎを楽しむのである。私も、笛がなってからも悠々と泳ぎを楽しんでいた。すると、プールサイドの2、3の男の子たちが頻りに私のことを話しているらしかった。多分、「あいつなぜ泳いでいるんだ？」とか「ガードに叱られるぞ」とか「まだ大人じゃないだろう……」とかいう意味のことを言っているのであろう。それで私はプールサイドの彼らに近づいて声をかけた。「やあーっ！」と。

「君たちは僕を何歳くらいだと思う？」

「17歳？」「18歳？」「19歳？」

いろんな口からいろんな答が即座に返って来た。その度に私は「いや、違う」と言ってやらね

ばならなかった。

「じゃー、20歳なの？」と、今度はかなりの自信を持って、そのうちの1人が問いかけた。その問い方には“*Yes.*”を期待する響きが相当籠められていた。しかし、期待外れにも私は「そうじゃないよ」と返答せざるを得なかった。

「25歳だよ。」

そう言うと、子供たちは啞然として「嘘だ、嘘だ」と確信に満ちて言うのだった。仕方なく、一緒にいたフレデリックに説明してもらい、ようやく認めさせることができたのだった。

こういうことは私の場合だけでなく、しばしばあるようだ。若く見られて、喜んでいいのやら、てれ臭いやら、そういう気持を味わった日本人も多いと思う。

夕食後は、最後の夜とあって夫妻と自由な談笑に時間の経つのを忘れた。その際、彼らはいろいろなプレゼントのほかにも次のような寄せ書きを送ってくれた。

◎He who dares to teach must never cease to learn. —Marilyn

◎The Cubs Will Shine In 1969. —Frederick.

◎The moving finger writes—having writ,

Moves on: Nor all your piety nor wit,

Shall wipe it back to cancel half a line,

Nor all your tears wash out a word of it

[Rubaiyat—Omor Khayyam] —Fred

◎Please give my best to Eiji—Clare (電話で)

三人三様でなかなか面白い。

アメリカの家庭教育についての話題にも触れておこう。書物や人の話によく聞いたものだが、アメリカの家庭教育は厳格である、というのは必ずしも当たってはいないようである。例えば、「子供が道でころんで倒れても、アメリカの母親は駆け寄って起こしてやることはせず、自分で立つまで待っている」という有名な例を持ち出して夫妻に問い質してみたところ、即座に「そんなことはありませんよ」とマリリンの返答があった。親の子に寄せる愛情はいずれも同じというわけである。これに関連して、フレッドはこんな話も例に取った。

「例えば、シカゴのストックヤードにはもう人など寄りつかない、と人は信じているんです。一種の神話みたいになっているのですね。しかし、事実はそんなことはないのです、私もつい先日そこへ行って来ました。(マリリンの友人の1人リンストラム夫人は、私たちのストックヤード訪問のことを聞いて嘘だと思ったという。)」

これを dispel myth と言う。なかなか面白い喩えである。

「だから、私たちは子供たちを喜ばせるためなら、何百マイルだって車を運転して行くこともあります。」と、マリリンは語気を強めた。

子供の話のついでに、フレッドは私に1つの忠告を与えてくれた。「子供が生まれる2、3週間前からは十分睡眠を取っておくように……」と。(当時、私の妻は妊娠5ヶ月であった。)生まれると、思うように睡眠が取れないからだという。しかし、私はこの話にはピーンと来なかった。た

だ漫然と聞いているだけであった。（後日、夜中に泣かれたり、明け方の熟睡期に起こされたりする度に、このフレッドのことは懐かしく、また辛く思い出したことである。）

高校生の実情、特に夏休みの過ごし方についても彼らは語ってくれた。この長い休暇中、彼らはボーイ・スカウトに加わったり、病院で働いたり、あるいは幼稚園などで子供に教えてやったり、さまざまな奉仕活動をやるそうだ。そのことによってお金をもらうが、目的はそれだけではない、と夫妻は強調していた。自分の部屋にもどって、「生徒の天国——夏休み」と題して、1人最後の夜に対した。

「アメリカの学校の休みは長い。日本だとせいぜい40日だが、アメリカのそれは大体6月中旬頃から始まり、8月末日まで約75日続く。この期間は前年度と新年度の区切りに当たるため宿題もなく、子供たちにとって全くの天国である。日本の夏休みとは少し違うようだ。日本では1学期と2学期の途中なので、宿題も当然のことに多く出され、8月後半になって親子ともども四苦八苦する姿はもうごく常識の絵になってしまった。しかし、ここアメリカでは9月の新年度開始時まで、子供たちは伸び伸びと生活する。小学生や中学生などは毎日のように近くの立派な町営ないし市営のプールに泳ぎに行く。肉体的に大きく育つのも至極当たり前のように思える。プールはだいたい夜の10時頃まで開いている。照明装置や水温調整も行き届いているので昼夜プールは満員である。

さて、高校生はどういう生活をするのであろうか。プールでは小中学生に比し、その数は多くはなかった。彼らはこの長い休みを利用して、アルバイトに精出すのだ。ではその目的は？ もちろん、大学進学のための学費を自分で稼ぐのだ。スーパーマーケット、食料品店、ガソリンスタンド、ベイビー・シッター、芝刈り、時には工場で、あらゆるところで彼らは働く。もちろん、すべての高校生がアルバイトをし、すべての高校生が大学に行くわけではないが、この長い休みに、だいたい彼らは働くのである。学費調達ばかりでなく、自動車を買う目的のために働く者もいる。ともかく70日以上もの休みがあるのだから、その気になれば学資金はある程度まで可能だ。公立のイリノイ大学（州立）の年間授業料が150ドル（約5万4千円）なのだから……。自力で大学へ行く者もいるし、また親が授業料を出してやって子供が本代、文房具代、その他を買うというケースも多い。

夏は、彼らアメリカの若者が大きく成長する時だ。」